364
295

始

业甘樂鄉出版

364-295

北甘樂郡略圖

1/120,000

長野縣　北佐久郡　群馬郡　多野郡

北甘樂　樂　馬山村　碧戸村　尾津村　西牧村　小坂村　妙義町　高田村　丹生村　宮町　岩井村　高岡町　高瀬村　岡本　南牧村　秋畑村　新屋村　福島町　星田　岩平村　藤　小野村　相馬田　丁吉尾　上高尾　高岩　上高岩　東岩　係　新屋　小幡小幡村　小川　野　白岩　後賀　老川　本宿　内匠　鶏部村　四野　渋川　八塩澤　六車村　月形　大日向　仁田村　白山　鳥山　青倉村　風口　宮室　余車　千原　宮戸　大仁田　熊倉　福川　特澤　北澤　星尾

至長野　至佐野　至尼岡　至藤巣　至吉井町　至日野　至田口　至余地　至義地　至内山越　至岩村田道

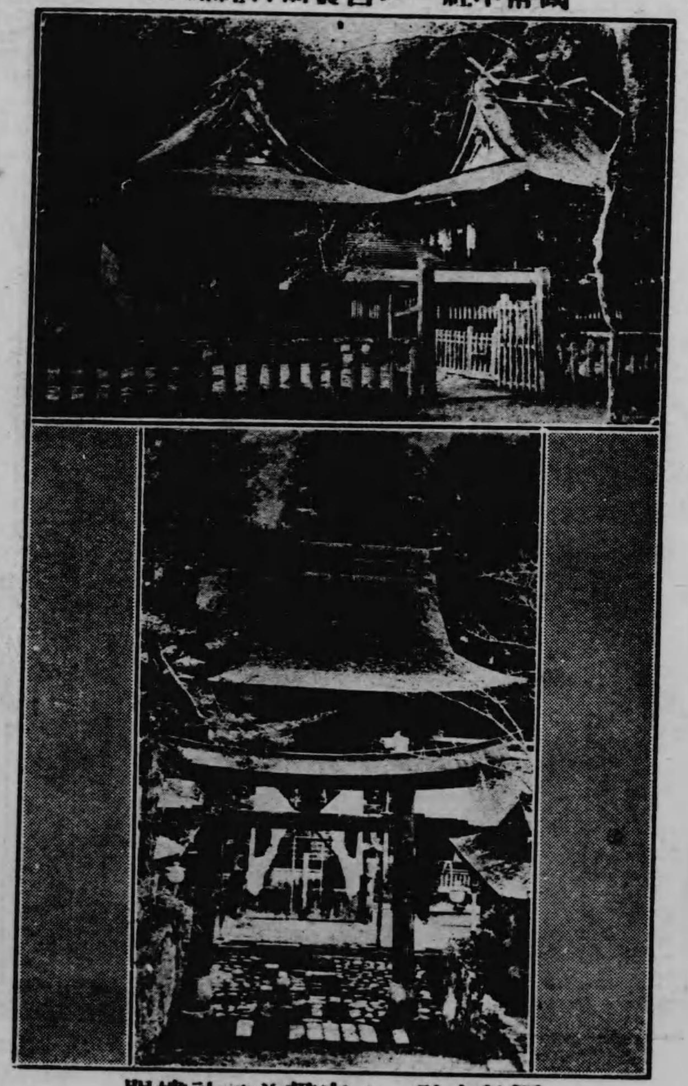
符號

町村　大字　國縣　里鐵　市町村　郵便局　古城跡　古戰場　神社　山祇　郡役所　道路　道路　街道　道路　有料　河川

大正 8 6 役 内交

364-295

國幣中社一ノ宮貫前神社社殿



國幣中社一ノ宮貫前神社楼門

上一ノ宮貫前神社國寶梅ニ雀ノ文樣

中仝竹ニ虎文樣
下仝月宮鑑

社神義妙

門唐社神義妙

殿御拜宮奮山義妙

白雲山遠望

妙義神社青銅鳥居

門前商業繁盛

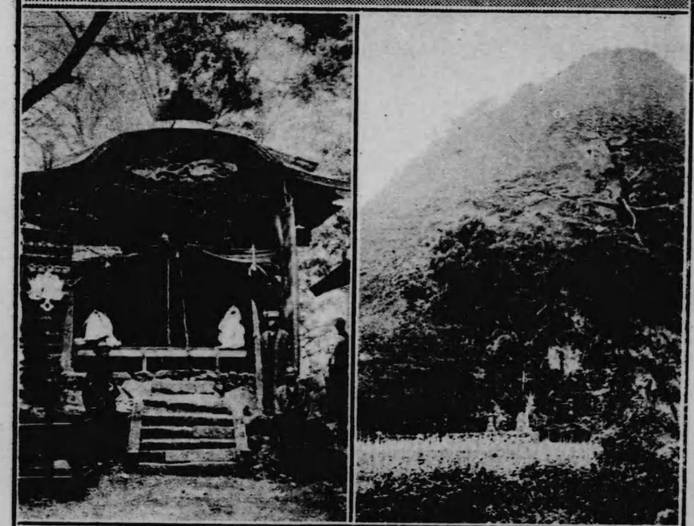
金洞山

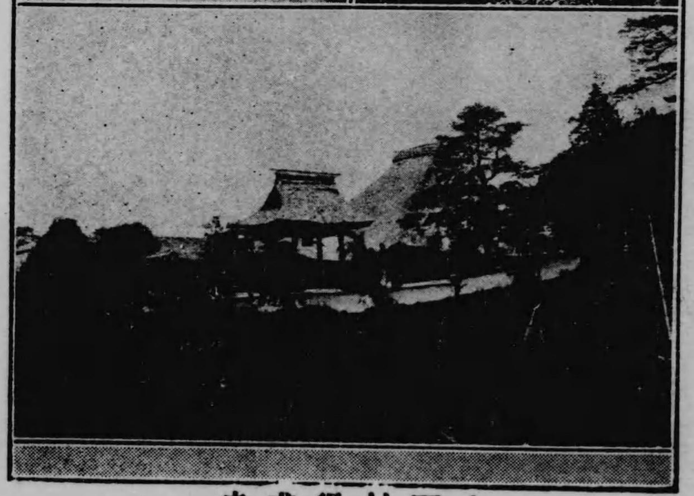
宮奥及岳旭嶽之中

第一第二第三第四石門

高崎藩士及
水戸浪士古戰場

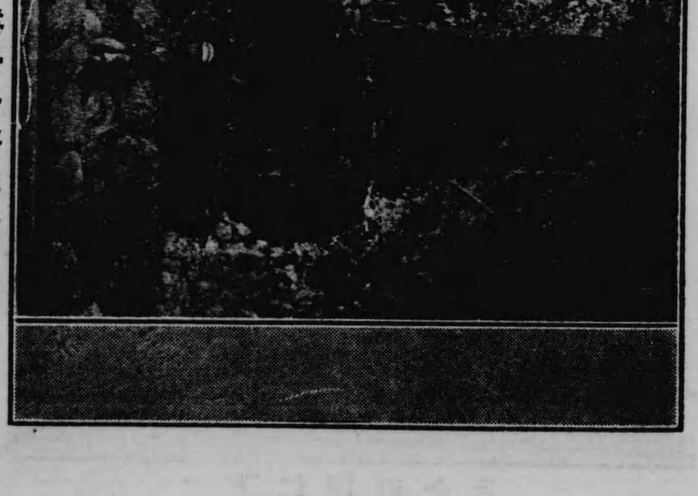
白光山白倉大神





小野村得成寺

小幡城峰國村幡

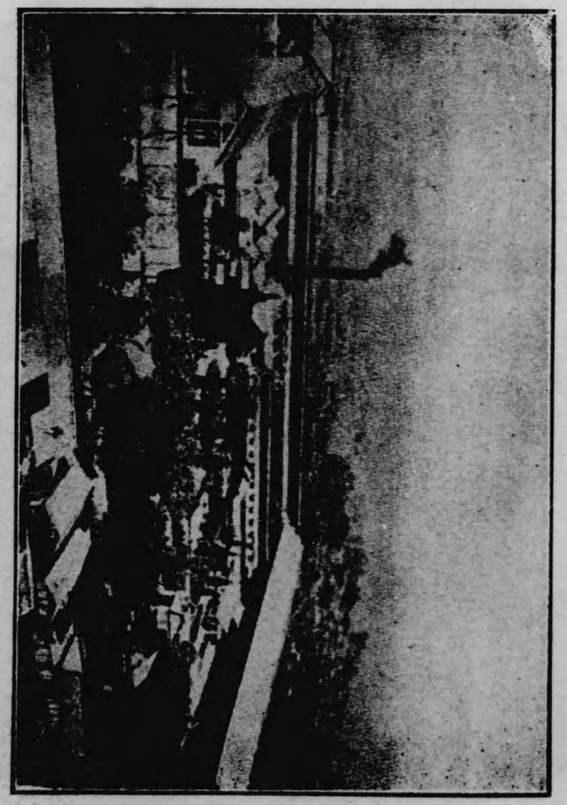


黑瀧山の全景

水戸浪士之牌

丹生村岡部榮信氏本邸

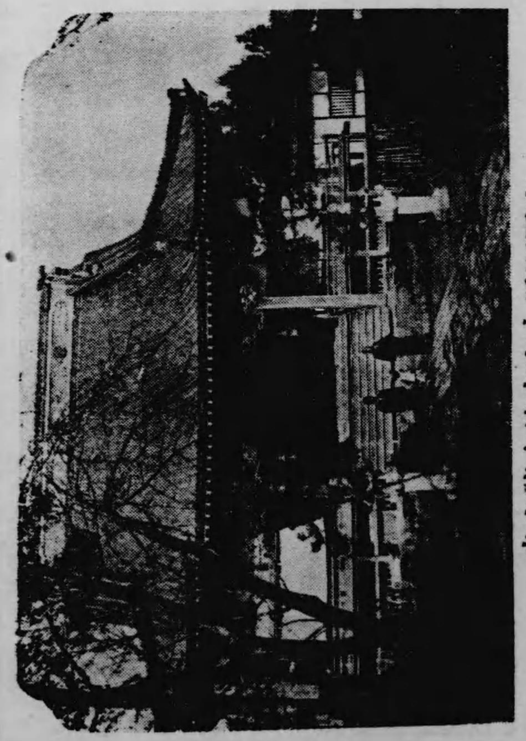
下仁田町全景



富岡製絲所全景

下仁田社全景

社長全景



宮岡町浄土宗龍山崎宮光寺

自叙

現今案内誌、繁昌記、郷土誌等の上梓せらるゝもの敢て尠しとせず、雖然其の範圍は一地方に限り其の内容は多く古文書の抄録に止まりて未だ本郡現時の狀態を簡明に叙し其の資たる可きものは嘗て非ざる也、之れ本郡の實勢風光を紹介する上にも亦不案内者の便宜を缺く點よりも遺憾千萬にして余の常に意思する所なりしが、偶本郡の他郡に比して衰微しつゝあるを憂ひ之れが發展策の一助として其の初版を發見せり、然れ共其考案の咄嗟に出るの故を以て編纂の心匠其の宜しきを失し諸彦をして之を見せしめば其見戯の評を免かる能はざるは固より疑を要せず、若し本書に依りて幸に幾分の便宜と倡伴たるを得る者あらんか、著者の本懐之れに過ぎざる也

大正六年九月

小竹茂識

目次

□總論……一
□宮岡町……三
□黑岩村……四七
□一之宮町……五八
□丹生村……七四
□高田村……八三
□妙義町……八八
□小坂村……九八
□西牧村……一一〇
□尾澤村……一一六
□月形村……一二三
□磐戸村……一二七
□青倉村……一三五

□下仁田町……一三八
□馬山村……一四四
□吉田村……一四八
□高瀬村……一五一
□額部村……一六〇
□秋畑村……一六二
□小幡村……一六六
□福島町……一七二
□新屋村……一七六
□岩平村……一八〇
□小野村……一八五
□富岡製糸所の沿革……一九一
□甘樂社の沿革……一九三
□下仁田社の沿革……一九五
□人物……一九八

北甘樂郡鄉土誌

小竹春雪編

○總論

北甘樂郡の地たる縣の西南部に位し東南は多野群馬の二郡に接し西は一帶信濃の南北佐久郡に境し北は碓氷郡に連り見るから邊鄙の地たるが如しと雖も巨細に觀察せば實に趣味多くして將來大に發展の地たるを知るに足るものあらん

西南は山嶽相連り巍々として聳ゆるは妙義、荒船、大桁の諸山高峰洋々として頗る峻嶮を極め北方は丘陵ありて東方は平坦にして土地豊饒なり鏑川は郡の中部を貫流して東に走り延々十里にして高田川

と相合し以て多野郡に入る面積は二十六方里八十二町にして東西八里二十六町南北八里九町を占め戸數一萬三千四百十八戸、人口八萬八千六百二十人を有し郡衙より縣廳に至る七里十一町、碓氷郡役所へ二里二十八町、多野郡役所へ四里二十三町、群馬郡役所へ四里二十八町等あり

運輸交通に至りては本郡は從來信濃街道の別路にして高崎市より富岡町を經て長野縣に入るものと多野郡藤岡町より吉井を經て富岡町に來るものとあり、上野鐵道は高崎を起点に多野郡へ出で更に本郡の中央を鏑川沿岸に溯り富岡町より下仁田町に至る實に本郡の活路にして貨物の出入旅客の往來悉く之によらざるはなく交通至便なり

又妙義中之嶽の奇勝は人をして詩的心腸を感發せしむべく史的事跡

を發見せしむるものあるべし若夫れ閑余散策を試みんが富岡の原製絲所、福島の笹森稲荷、一之宮の貫前神社、黑岩の大日尊、小野の長覺寺及得成寺、磐戸の黑瀧山、高瀨の北向觀世音、妙義の妙義神社等皆二三時間の行程にて數日の積鬱を洗滌し昏に歸るを得ん

郡の大勢は富岡、下仁田、妙義、一之宮、福島の五ヶ町及び黑岩、丹生、高田、小坂、西牧、尾澤、月形、磐戸、青倉、馬山、吉田、高瀨、額部、秋畑、小幡、新屋、岩平、小野の十八ヶ村より成る

○富岡町

富岡町は郡の中央より稍々東に編し鏑、高田二川の間に位し鏑川を距てゝ東は福島町大字田篠村に、南は高瀨村に境し、西は一之宮町

に續き、北は黒岩村大字黒川村及大字別保村に接し、正北は字城山の嶺を以て黒岩村大字下黒岩村及小野村大字上高尾村と境し北東は、高田川を劃して福島町大字君川村に接す地勢は一般に平坦にして東南に傾斜し中央部は海拔凡五百尺にして山と稱すべきものは僅に北方に城山の一部にして海拔約九百尺の丘陵あるのみ、土質は大部分黒色壤にして表土深けれども西部は輕く中央より東北部は米、麥、大豆等に適し中央より南部は稍々礫土にして最も桑園に適す、面積は東西一里十二町五十間、南北二十四町四十三間に達し、戸數二千六十一戸の人口一萬八百二十九人なり

○諏訪神社　富岡町字上町及仲町の鎮守にして祭神は建御名方命、八坂刀賣命の二神を祭れるなり、慶長年間當郡宮崎村より別當天善

宗延命院と共に當所に移り其の神体神輿及勅額（正一位諏訪大明神）等現存せり、慶安二年德川將軍家光以後代々社額として拾石を寄進せしが明治四年上地し別當延命院廢寺となりし故當社に傳はりし寶物古文書等は概ね散失して考證とすべきものなし、其後氏子中の有志三十五名醵金し土地の拂下を受け年々の作得收穫を以て醵金を償却し社有となす、尙仝社内に鐵製の神鏡あり、明治十五年五月現今の社掌松永兼重氏の嚴父故松永龍眠齊平兼行忌屋に籠り精進潔齊して鍛練し成りて當社に奉納せしものなり

○小舟神社　富岡町字下町にありて當郡一之宮町國幣中社貫前神社の攝社にして鎮座は或る私書に依れば白鳳七年三月十五日とあり、瀨下郷の内字小舟に社畠と言傳ふる地あり、始め茲に鎮座せしもの

にして其後寛永年間富岡新田檢地の内下町雷電領壹段二歩を社地と定め万治二年遷座す、別當福壽院代々奉仕し慶安三年四月十八日福壽院火災に罹り當社の古書全部燒失す、元祿十一年四月二十一日德川五代將軍綱吉社殿建立寄進し其後大破に付天保十三年拜殿及本社の上屋其他を改築す、尚當社は古より一之宮貫前神社の前宮にして一之宮に參詣する人は必ず先づ小舟神社を拜し後貫前神社に參拜する吉例なりしといふ、慶安二年德川三代將軍家光より社領二十石の寄進あり明治四年に至り上地となる

寶　物

一棟札　元錄十一年四月二十一日

一神輿　木製

一額　木製　正一位小舟大明神　一面

一飾鉾　葵紋彫刻　寶暦六年　一對

寶暦六年德川家重寄附

皇室崇敬　明治二年九月二十九日貫前神社へ勅使柳原侍從下向の節參拜幣帛料金壹圓神前に供せらる

武將崇敬　慶長十七年四月檢地の際德川秀忠より小舟明神領として上畑三段八畝歩中二段一畝五歩度外除地として下さる、天保十三年拜殿其他改築の節地頭寛助之進より玄米十石寄附せらる、社格は村社にして經津主神を祭る

○蛇宮神社　富岡町大字七日市町字森下にありて高靈神を祭神とし相殿には建御名方命、八坂刀賣命の二神あり本社は其始諏訪大神の

地社なりしが、明應二年九月二十九日白蛇の神靈ありて臺敎傳燈妙門慈眼に告ぐるに此地に社を建てゝ我を祭らば長く鎭護の神とならんと故に土人と謀りて諏訪社境内に一社を奉崇して蛇宮大明神と祭るといふ、舊領主前田家の崇拜により代々親祭及社殿を修理せしも、明治二年より七日市町一般の氏子に於保存せり、又元錄元年七日市藩士清水宜義宿願ありて鎌倉鶴岡八幡宮を勸居せりと、寶曆十年八月十五日同藩士横尾權右衛門宮殿を再建し華表石水磐等を奉進し明治四年當社境内に移轉し今日に及べるなり

○曾木神社　富岡町大字曾木村字鄉土にあり大國主命を祭る

○神明宮　富岡町大字曾木村字割目にあり大日靈命豐宇氣昆賣命、大宮比賣命、八坂刀賣命、猿田彦命、建御名方命、倉稻玉命の六神

を祭る神寶には御鏡、御大刀、御鉾、御弓、御矢、御桙、黃玉等あり

○稻荷社　富岡町大字七日市町舊郭にありて祭神には猿田彦命、倉稻魂命、大宮之賣命を相殿には市杵島姬命を祭りしが元和二年前田利孝藩邸内に建立して三社神社と稱し後寬永十四年六月利孝逝去の后三公を相殿に祭り同家代々尊崇の社にして造營修理をなしたるが明治四年より舊臣等奉祀し仝二十九年稻荷神社の地に社殿を移す

○滿願寺　富岡町字仲町北裏にありて天臺宗愛宕山といひ天保十二年一月八日燒失開山其他の由緒不詳

○本城寺　富岡町字下町南裏にあり當寺は創立大檀越を石井吉房氏と云ひ本姓を三浦氏と呼び世々相模國に住す而して源氏の仕官たり治承年間三浦義明仝義澄の父子賴朝を佐けて最も巧あり義澄の孫泰

村の時に至り三浦氏滅す實に寶治元丁未の年なり、而して泰村の子長勝母と共に鎌倉石井の郷に住す故ありて本姓を稱する能はず、之により姓を石井と改む氏深く法華經を崇信して建長五年我が邸外に一庵を營む後改めて石井山長勝寺と號す、現今存する鎌倉長勝寺是れなり、夫より十二代を經て勘解由左衛門尉吉房の時管領上杉憲政天文七年北條氏綱父子と戰ひ大敗して四方に離散す、吉房も亦管領の幕下たるを以て子彈正守清を提携し本郡宮崎村に所縁を訪問し來て農に歸す、然るに氏の家代々法華信仰なるを以て此地に一寺を建立せんと欲し未た果さずして歿す、子守清善く父の志を繼き奥平善作守家昌の免許を得て慶長三年一寺を宮崎村に建立して武州池上本門寺の客末寺として本城寺と號す、鎌倉石井山長勝寺より日皆上人

を招き開山となす（石井氏の子孫現今宇田村に在り）後寛永二年全郡富岡村に移す、二世日乘代明暦二年祝融の爲め諸堂什寺等悉く燒失す於是守清の孫吉綱等祖先の本願あるを以て棄置き難く淨財を喜捨し再建の終を告けしは萬治二年の頃なり、後天保十四年再び火災に罹り安政元年更に再建を始め三十世日總代なり、明治二十六年米田穩靜及び前住職奥澤智覺並に昨年遷化せる柳瀨義行等諸堂宇の修繕をなし以て今日の美觀をなせり

○栖雲寺　富岡町字屋敷にあり歸濟派大虎山と稱す、當寺は寛永四年創立長翁和尚の開山にして由緒不詳なり、境内に左の諸物あり

一本尊藥師如來　木像一個あり、本尊は享德三年創立開基聖徠主木の根自然像にして彫刻を加へす弘安年間安置と云ふ、元錄元年再

建の勸進帳の序文に記載あり

一無量壽佛　板石に彫刻の來迎の像一個あり、正慶二年三月とあり

文化十五年藥師堂修繕の際土中より發見せりと

一洪鐘　重量八十貫一個あり　銘白

頑銅鑄成　内空寶器　摩訶音鯨　潛塵囂車　一百八聲　破昏隨眠

接物利生　永々萬稔　國富道正　誰敢損棄

天明第二壬寅年臘月吉日

當山六世　敎山惠寛謹誌

○海源寺　富岡町字中町南裏にありて禪曹洞宗なり、當寺は慶長年間創立開山は寶積寺十二世芳永馨大和尚開基は中野七藏、侮保庄兵衛の兩氏德川氏代官として當地住居中建立せらる故に中法山海源寺と號す、本堂及び庫裡とも再三火災に罹り書類一切燒失せしより由緒不詳なり、仝寺に釋迦如來、厄除正觀世音菩薩あり、釋迦如來は明治二十六年四月假本堂火災に罹り佛像什器悉く燒失せしより長野縣南佐久郡田口村蕃松院より讓受安置せるなり

○壽福寺　富岡町字天神基にありて天臺宗なり當寺は天正十八年國峰城落去の際小幡氏の一子幼年にして此地に匿る、後文錄二年十一月病歿す之を善明院といふ小庵の傍に葬り其後寛永年間小幡氏の舊臣等相謀りて一寺を建立す是れ堂時の開基にして開山の僧を豪舜と云ふ其他は書類燒失して不明なり

○永心寺　富岡町大字七日市町にありて淨土宗なり、當寺の開基は舊七日市藩主前田右近太夫利意の祖母明蓮尼追福の爲め慶安元年の

開基にして法名を明運院殿照譽永心大禪定尼（墓は庭前にあり）依て道法山明運院永心寺と號し開山は淨蓮社清譽上人學翁和尙後享保十六年僧惠須中興の功あり

○慈眼寺　富岡町大字七日市町にありて天臺宗なり當寺は明應元年九月二十三日創立す開山を慈眼法師とし嘉永七年本堂庫裡等火災に罹りて全部燒失し由緒不詳、蛇宮山の由緒は當町氏神に蛇宮神社あり明應元年九月二十五日黑川村（現今の七日市町をいふ）南端鍋川なる岩淵鳴動し白蛇現はれ慈眼法師へ夢中に告げて曰く我を當所の氏神として祭らば鎭護なりて幸福を與へんと因りて當村の鎭守と祭り慈眼法師別當職として奉仕せり、後七日市藩主より田畑合せて五反歩を祭典の料として寄附せらる、然れども維新廢藩の際返地せり、

尙境內に七日市藩へ御預けとなりし和蘭通辯稻部市五郎昌種の墓あり天保十一年庚子八月二十二日歿せりと其墓誌に曰く

肥前長崎譯官稻部市五郎昌種文政間依有和蘭醫某與東都天文生某私通音書之事辜而其徒三人被保放于各所稻部氏廼在當藩中十一年嬰中風疾終天保十一年八月二十二日卒于監倉中法命樂邦常念居士聊其歲月以示之後來爾

○龍光寺　富岡町字上町にあり淨土宗なり、當寺は人王第百三代後花園帝の享德三年八月二十五日郡の綾目庄宮崎の邑一宇を建立し稱して宮崎山寶國院龍光寺と號す、而して開基は同宗藤田派の祖眞空上人の法胤にして全蓮社貞譽十聲一凝上人なり、時に應仁二年二月十五日入佛す蓋し師は世俗の塵埃と兵乱とを避けて關東の地に下り

諸國行脚の末遂に本郡宮崎邑里の中山に一庵を草創し念佛三昧に其日を送る事十有余年間時に前三河守從五位下世良田泰親三代裔超譽公は師と蓮門の友たるを以て師を此地に尋ね領主藤田次郎右衛門季忠及城代宮崎和泉守其德を貴んで一寺を草創し開堂開法せしむ、天正十八年八月二十五日奥平信昌來りて宮崎城を領し又代官中野七藏も來りて宮崎に任ず、信昌慶長五年關ヶ原の役に從ひ戰終りて後命に依り京師を守護し仝六年二月十日美濃國加納城に轉じ十萬石に加封せられ縣令中野七藏も郡の遠見丘を開墾し寛永九年富岡と名稱し仝十年代官所を移し後龍光寺、滿願寺、延命院の三刹を移し現在の地を寄捨せり、慶安二年八月二十四日四世學應上人大猷院殿歸向し朱印を賜はる、十三世性譽上人現在の洪鐘を鑄る該寺は實に淨土宗

中本郡第一の巨刹なり、然るに明治二十三年五月十三日祝融の災ありて灰燼に歸し古記錄及什寶も燒失せり、後二十三世達譽祖霸、祖徒と謀り苦心經營して今の伽藍を再建し續て法弟大譽寛梁師住して本堂内へ莊嚴物悉く完備せり外に大門より本堂まで宗祖七百年御忌記念の爲め巾六尺長さ六十六間の大敷石を施し參拜者の便を謀れり寶物には黑本尊無量壽如來一軀、上宮太子一夜彫刻（宇田天皇秘藏佛にして有縁の地なる故安置す）あり

○天理教會　字城町にありて明治三十五年八月六日の認可にして名稱を天理教日本橋大教會北甘樂支教會といひ國常立尊、國狹槌尊、豐斟渟尊、大苦邊尊、西足尊、惶根尊、伊弉諾尊、伊弉冊尊、大日靈尊、月夜見尊の拾神を祭祀す

◎日蓮宗說教所　字城町にあり一名長者塚ともいひ明治二十四年十月二十九日設立認可にして現今は有名無實の有樣なりき

○基督教會　字城町にありて明治十七年二月二十一日の創設にして基督北甘樂教會といひ齊藤壽雄氏の管理にして布教師には是迄岡部太郎氏其任に當り名聲嘖々たりしが不幸にして氏は大正六年五月を以て辞し故郷なる長野縣に歸り目下後任布教師選定中なり

○本願寺說教所　字仲町南裏にあり眞宗にして明治五年梅原彗蓮なるもの眞宗布教の爲め當地へ巡廻し信徒吉野藤作、五十嵐洋庵、若林庄兵衛、小山兼松等の望により海源寺上地拂下けの内畑一畝十二歩及仝寺墓地の内若干を分裂して海源寺より讓り受け梅原氏新たに家屋を設け信徒の埋葬並法要を取扱ひ爾來繼續し明治三十四年認可

を得て公式說教所となり現今に及べるなり

○不動堂　字下町にあり本尊を不動明王にして前立童子二躰あり、寛保元年中本山修驗福壽坊二十三代賢友邸内に不動尊を安置し明治五年歸農に付信徒に於て維持す明治十七年三月十日下總國成田山住職三池鳳照奉仕再開眼智劔講社と稱し佛堂公稱認可せらる

○諸學校の沿革　富岡小學校明治六年五月創立公立富岡小學校と稱し字上町龍光寺に設置せり、仝七年四月分離して富岡小學校七日市小學校となる、仝八年富岡小學校再分離して富岡小學校富岡東小學校となる（字瀨下町崇光院）仝十六年一月前二校合併して富岡小學校と稱す、仝十八年四月七日市小學校、黑岩小學校とを合併、北甘樂第一小學校と稱す、仝十九年四月聯合解散高等科分離、北甘樂第一

尋常小學校と稱し、仝二十年改めて富岡尋常小學校と稱す仝二十三年曾木村小學校合併仝三十年二月七日市小學校を併合し富岡尋常小學校と稱し仝年三月高等小學校併置仝三十一年四月新築校舍一棟落成につき兒童を男子女子の兩部に分け女子部を新築校舍に男子を舊校舍に收容し敎授せり仝年四月高等科男生徒全部を新築校舍に移す仝年九月新築全部工を竣へ仝校兒童を一校に收容す仝三十三年四月二十日校舍新築落成式を行ふ仝三十七年十一月初めて學校園を設置す仝三十八年六月校舍の狹隘を告げ東舍に一室を增築す仝四十年三月小學校令改正義務敎育を六ヶ年に延長し本年四月より實施せられしを以て始めて尋常五學年を置く仝四十二年九月校舍增築の工を起す是より先義務敎育延長の結果校舍の狹隘を告げ更に增築の計畫あり後工を起し仝四十三年三月工竣る然して現今に至る

○富岡中學校　字七日市町にあり、明治三十一年四月群馬縣中學校甘樂分校を字七日市町舊郭舊藩邸內に置き三年級までの生徒を養成せり仝三十三年增築後富岡中學校と改稱し學級を五學年までとし本校となりて現今に至る

現在生徒數　百九十三人

卒業生徒數　六百五十人

○郡立女學校　字仲町南裏にあり明治四十二年四月北甘樂敎育會の施設にて北甘樂郡女子實業講習所の名稱にて開所し敎科目は凡高等女學校の學科程度にして三ヶ年程度を以て居りしが校舍の狹隘と敎育の進步とに伴ひ仝四十四年四月二十三日新築落成し同時に北甘樂

郡立實科高等女學校と改稱し本科を三年補習科を一年とし現今に至れるなり

現在生徒數　百二十五名

卒業生徒數　百八十三名

補習卒業生徒數　五十七名

○大字富岡町　往昔は詳ならず瀨下村は字小澤、小田谷、屋敷、原本宿、酢ノ瀨、宮山の各小字に散在せる部落の總稱にして和名抄に郷名端下とあり、端下の誤りなりと云ふ、慶長十七年四月檢地帳に西上州甘樂郡小幡領瀨下郷とあり、檢地改役福島嘉兵衛、中島十右衛門、大塚庄太郎、近藤久右工門檢地の上、上田畑宅地反別百四十五町二畝十歩を吉田と云ひ、德川幕府代官中野七藏支配となる、當

時瀨下村に屬せさる原野の開墾を爲し寛永四年九月八日より檢地あり增加反別六十一町二反六畝十二歩にして內上町、仲町、下町になり町形となせるところを富岡町と稱し其他の耕地を富岡新田と云へり、而して開墾出願當時より御檢地濟までの間特別功勞者に對しては夫れ〳〵御檢地として租稅免除の宅地を下附せらる、前記開墾によりて當町は秣苅取場を失ひたるに因りて本郡秋畑村內に於て新に仝村と入合秣場を定められ毎年秣稅永貫十六文に分ちつゝを富岡町の石高に割合て上納し瀨下村に入合苅取をなす明治初年に至り秋畑村へ協議し仝村の專屬となる、慶長次降字上町に新屋敷といふ地あり、中野氏在勤住居して其領邑を治む、時に富岡町字南城に陣屋を築かんとて西は南北九十五間の土手を以て七日市と境し北は東西五

十九間東は南北八十九間に巾五間の土手及濠を廻し耕地と境して南は鏑川崖上に至るまで其繩張りをなせしも寛永九年旗本の士へ私領分鄕せしにより中途廢止せり、該地二町四反二十七歩は正保二年檢地の上民有となり、外圍の土手及濠は上町問屋二左衛門、中町問屋九郎治の祖先へ預け地となり支配したりしが明治四年富岡製絲所官宅に際し用地となり上地す、富岡町開墾以來上町、中町には人民社寺（諏訪神社龍光寺）共に本郡宮崎村より移轉せしもの多く下町には各小學校永住者多く移りしなり、寛永四年瀨下町は寛、天野、采地となり、富岡町垣岡の采地となりし時に當りて統治上の關係より天野寛二氏と恒岡氏と協議し瀨下町の内寛、天野の所領田方高六十二石七斗一升九合を恒岡氏に受取り下町住民五十一戸、宅地畑合高六

十二石一升九合を割きて寛天野岡登の二氏に渡し瀨下村の土地と合せて瀨下町といふ、元祿四年竹内氏天野氏に代り上町、中町へ分轄して名主二名を置けり、富岡町及瀨下町を合せて富岡町と稱せしは萬治年間頃ならん、明治元年岩鼻縣の管轄となり戸長一人を置く當時戸數四百二十七戸、人口千七百五十三人なり、仝五年十月群馬縣に仝七年には熊谷縣に仝九年八月再び群馬縣の管轄に属し明治二十二年五月七日市町曾木村を合せて富岡町と稱す、

○大字七日市町　中古時代は南黑川村と稱したるが何時の頃よりか七日市と稱すに至れり、天正十八年水野隼人正忠清本町に住し一萬十四石余を領せり、元和二年前田利孝加賀より移り水野氏に代りて此の地を領す、十二代前田利昭に至り明治二年封土を奉還し七日市

藩となり、仝四年七日市縣と云へり仝十一年黑川村別保村の兩村を合して七日市町に役場を置き、仝十七年上下黑岩村も之に聯合したりしが仝二十二年に至り本町は分離して富岡に合併して富岡町大字七日市町と稱するに至れり

○大字曾木村　此の地は天正十八年水野隼人正の領地となり、元和二年前田利孝代りて之を領す、明治二年七日市藩の管下となり仝四年七日市縣に屬し仝五年には群馬縣に仝七年には熊谷縣に仝九年八月再び群馬縣の管轄に屬し仝十一年君川村、星田村の二村と聯合して戸長役場を當村に置き中山半助戸長となる、仝十四年分離獨立し中山鐵四郎氏戸長となる、仝十六年には福島町外五箇村と聯合したりしが仝二十二年福島町より分離して富岡町に合し現今に至る

○偉人豪傑

畑金鷄　畑金鷄氏姓を平氏、道雲と稱し七日市藩主前田氏に仕へ醫を以て鳴る、然るに翁幼時より風流の道に志し俳諧、歌を好み狂歌を善くし當時の狂歌者流中有名なり、齡三十六にして仕を辞し四萬に歷遊し後江戸に止り墨田川の邊り橋場の里に月花を愛て文化六年正月二十一日齡四十三にして此處に歿す、屍を本郡小野村大字高尾村長學寺に歛葬す、翁醫道に依りて著はす書に金鷄醫談あり、俳諧歌の料に戯に世に刊行したる書十種に及べり、翁に三男二女あり、嫡子時倚は毛義平亭銀鷄と云ひ諸學に亘り著書多く醫を善くす、翁の後を繼き七日市藩に仕ふ、孫隱鐵鷄と號し是亦醫を業とし文暈派

の山水花鳥を畫く

佐藤國太郎　佐藤國太郎氏は醫師山口道碩の第三子で文政五年八月十三日甘樂郡福島町に生る六才の時父を失ひ八才の時より外戚なる同郡小坂村の永井萬之亟の家に養はれ、農業實習のために人知れぬ辛苦をしたのである、十五才の時富岡町の佐藤彦兵衛の養子となり翌年始めて蠶種一枚を二朱二百文にて買入れ自宅二階の廣間に於て天然の氣候に任せ飼育し自身に寒氣を感する時は戸障子を閉ぢ火を以て之を補ひ又空氣の流通を滑らかならしめ其結果繭四貫二百匁を收めたるが斯く少量にては當時物價一兩に上米八斗五升又大麥は一石六斗五升に比べ繭は八百匁と云ふ高値なるより、於是農業收益中養蠶に及ぶものなきを知り、夙に意を蠶種の製造に用ゐ、苦辛慘憺

漸く獨特の一種を製出して鬼縮と命名したるは、實に嘉永三年頃なりき、其後益々蠶種に改良に改良を加へ白綾種と命名せる新種を作りたり、是れ實に故小松宮殿下の御留種となり、年々御飼育の光榮を得たるものなり、然して佐藤氏は、如彼くにして蠶種の撰擇に辛慘を嘗め益々其發展を期したるに我が蠶種は外國に輸出せらるゝ事となり、價格も亦隨つて騰貴する所となりしが。是に於て粗製濫造の弊起り我蠶種の名聲を墜すを慨き、之れが弊を矯正し名譽を挽回せんことに力め、卒先自已の製に改良を加へて粗製濫造の弊を矯正せり、後同業者を奬勵し蠶業會を起し會員の推選に依り社長となり熱心之に從事し自家に在りては、懇に傳習生を敎示養成し又自ら資を投じて富岡町に製絲揚返場を設け、之が模範を示し明治十四年植

物御苑に召され蠶事を囑托せらるゝに當り、一身名譽を荷ひて之に從事し其他各府縣下を巡回して蠶業改良を奬勵し、又各地方質問囑托に對しては諄々として之に答へ、嫌忌する處なく其揷益尠なからず、斯くて實業に精勵すること多年明治二十五年十月政府其功を賞し綬褒章を賜ひて其善行を表彰せらる、仝三十二年初夏の頃より身体に異狀を來し、翌三十三年三月十六日七十九才を以て歿し、仝町上町龍光寺に於て葬儀を營む、會する者無慮千三百余名吊詞にして重なる人々より寄せられしものは左の如し

子爵榎本武揚、男爵高崎正風、男爵楫取素彦、時の農商務次官藤田四郎、時の本縣知事古莊嘉門、時の大日本蠶糸會幹事長岡毅

佐藤墨溪　佐藤墨溪氏は北甘樂郡富岡町二百五十番地佐藤市太郎の

祖父にして安永三年奥州會津に生る、幼より書を好み長して江戸に出で諸大家に就き書道の蘊奥を極み、墨溪醉墨と稱す、性快活にして放豪書道に其妙を得文化の初年長崎に遊び居ること三年、以來關西地方を漫遊す、此常時書道に於ける名聲漸く高し、文政二年碓氷郡坂本驛に來り米屋源兵衛の養子と爲り佐藤墨溪と稱す、後天保元年居を富岡町字仲町に移し時は年五十六翁其後病に患り齡七十有二才を以て弘化三年丙午八月七日歿す、依て之れを仝町海源寺内に墨溪永年居士と追號して葬る

中山環　中山環氏は富岡町大字曾木村中山雄次の祖父にして、明和六年仝地に生る、中村權右衛門の長子にして母を君里と云ふ、環幼名を雄次諱瑾親又環齊と號し性温順にして沈着、容貌一見愚なるが

如しと、然れ共萬事に通ぜる藝なく就中最も文筆を能くし又音樂の道に長す、二十才の頃出でゝ勢多郡津久田村仙敎院無玄道人を師とし、專ら文學を修め居事數年、去りて鄕里に歸り尙學術諸藝の爲め諸國を遊歷し其間技藝益々達し遠近諸候の知遇を蒙り、聘せられて講書を爲す、周遊後歸りて領主七日市藩主に仕へ、文學の指南たり又居村曾木村名主となり其傍ら隣藩諸候の招聘を受け諸道の師範たり中に領主前田候の寵愛最も多く賜はるに上下一流と環齊の號を以てす年既に古稀なるを以て藩の講書の余暇隣村の子弟を訓育し書畫を友とし專ら老後の樂となす、翁幼少より妻子なく姪を以て養子と爲す、姪又書を能くすと故に翁書は隷書、畫は梅布袋等最も佳作なり、其遺墨及自製の笙篳篥は今尙家に寶藏す嘉永三年十一月七日歳

八十二歳にして歿す

○古　蹟

富岡町字屋敷に城と稱ふる地あり、面積四段六畝十二歩、往古は濠土手等存したりと、追年開墾して今は小丘に稲荷社と土手との形跡僅かに二箇所に存す、傳へ云ふ往昔瀬下氏の居住なりしと、別に証とすべきものなし現住の安藤氏は祖先より此地に住せりといふ

○おのれの瀧　大字曾木村字關宿に瀧あり、時の皇大后宮、皇后兩陛下、富岡製絲所に行啓あらせられし歸途、鏑川沿岸字築場に前田氏の別邸あり、瀧見の茶屋と云ふ西方崖上より懸泉落下數丈頗る眺望に富むを以て同邸に御休憩あらせられ陛下の御賞覽を辱ふし且左

の御製あり

御製

作りなす、瀧にはあらでおもしろく
おのれと落つる音のすゞしき

爾來人呼びておのれの瀧と云ひ、仝村の石井氏時の縣令揖取素彦君に揮毫を乞ひ、石に刻して碑を立つ、後上野鐵道の線路に當り斷崖を掘鑿して現に至り碑は今尚石井氏の宅地内に存し、前田氏の別邸は目下人手に渡り其儘となり、名物瀧の餅を作りて今尚通行人を以て益盛なり

○德川時代の沿革

富岡仝町は中古小幡領と稱せり、舊記詳ならずと雖も水野氏家譜に隼人正忠清上州小幡に住し後三州刈屋に移るとあり、又七日市藩の舊記に依れば水野氏の後前田氏加賀より移るとあり、口碑に當時附近の村落は德川氏の入國以前小幡氏の盛時廣く小幡と唱へしものか古書に小幡領瀨下郷と記載せるものあり、慶長十八年七月德川氏關東を總領せし後七日市町及び曾木村を併せて元和二年まで水野氏の領邑たりしが、仝年前田大和守利孝加賀より移り、水野氏に代れり當時高九百九十五石七斗七升三合にして瀨下村及び富岡村は德川氏代官中野七郎支配せり、寛永九年瀨下村、富岡村の内高五百四十五石七斗七升三合は天野六左工門、岡登次郎兵衛の二氏、殘高四百五十石に寛助十郎垣岡新左工門の私領となり、元祿四年に至り竹田氏

天野氏に代り後明治元年に至り岩鼻縣の管轄となり又熊谷縣となりて後群馬縣と成るに至れり

○明治以後の沿革及主なる公人

一大字富岡町は維新の後岩鼻縣の管轄に屬してより名主黑澤源七、組頭矢島周平、仝古澤小三郎、仝淺野孝五郎の四人を置き租稅の徵收のみは或事情より四箇所に於て取扱ひ一般の事務は名主の宅に於てす、當時大小區の設けあり、本町は第十二大區八小區となる、明治五年新に事務所を下町第九百八十七番地に設け從來の四箇所に於ける取扱を廢し一切の事務を此處に於て取扱ふこととなる、仝六年八月古澤小三郎戶長となるに及び下町の事務所を廢し役場を同氏の

自宅に設け仝十四年に至り更に字仲町北裏乙第千四百八番地北甘樂郡役所內の一部にし仝二十二年五月七日市町會木村を合して富岡町と稱す仝二十四年十月に至り現今の役場西隣りに移り後大正五年五月現置に移れるなり

一大字七日市町は明治二年六月まで前田氏の領邑たりしが、前田氏其封土を奉還するに及び七日市藩の所轄となる當時田島吉次氏名主を勤め爾後變遷して仝九年群馬縣に屬す、此間舊藩邸宅及所有地に係る地區を分ちて齊藤正邦氏を戶長とす而して町の戶長は舊名主田島吉次氏にして仝十一年黑川村別保村と聯合して役場を本町に置く仝十三年十一月黑川村分離す、當時の戶長は松井平藏氏にして役場は依然本町にあり、仝十六年十一月大岡豊次郎氏戶長を命せられ仝

十七年八月退職す、此時更に上下黒岩、黒川、別保の諸村本町と聯合し戸長は富岡町戸長古澤小三郎氏の兼務する所となる仝十八年六月仝氏職を辞するに及び保坂正義氏代て戸長の職に就き仝二十二年五月に至るまで勤續せり

一大字曾木村は寛永十七年檢地あり乙より明治二年まで前田氏領有たりしが仝年六月其封土を奉還するに及び七日市藩の所屬となる、爾後變遷して仝九年更に群馬縣に屬す、仝十一年星田、君川の二村と聯合して役場を本村に置き中山半助氏戸長を務む、仝十四年分離獨立して中山鐵次郎氏戸長となる、仝十六年福島町外五ヶ村と聯合す此時の役場は福島町に在り仝二十二年前の聯合町と分離して富岡町に合併す

一富岡町に初め町民多く農業を營みしが明治五年富岡製糸所の新設せらるるに及び多數の工女を要し遠近より募集す、從つて本町に移住するもの年と共に多く又諸官衙等の設置せらるるや益戸數人口を增加し遂に本郡商業の中心となるに至れり、役場の如きも明治二十二年五月町村制實地に際し七日市町及曾木村を合併し民屋を以て役場に充てしが事務取扱上不便を感じ仝二十四年富岡町字諏訪横丁に新築し仝四十二年三月隣家なる富岡區裁判所新築移轉せるより町役場にては更に其土地を買ひ受け役場敷地とし大正五年五月新築移轉し舊宅を後方に引移して前場所空地となして現今に及べり

○官公署諸團体

○富岡町役場　本町の中央に位し字大富岡町千四百廿九番地にあり

○富岡郵便局　明治四年七月始めて富岡仲町に郵便假役所を置かれ古澤小三郎氏役所結を拜命し自宅を以て之にあて後郵便局となる明治二十一年九月富岡製絲所内に電信局を設置、仝二十二年十月郵便局に合併し古澤氏郵便電信局長となる、仝二十五年十一月辞職仝月古澤福吉氏局長となり仝四十年十月職を辞す、次に木田清三郎氏局長を拜命し舊地より仝町千二十番地に新築移轉し仝四十一年六月特設電話を架設し現今にては七十九戸を有するに至れり

○富岡警察署　明治九年群馬縣警察出張所を現今の地に置き後富岡警察署と改名し仝三十三年十二月新築竣工し現今に至る

○北甘樂郡役所　明治十一年十二月假役所を仲町南裏本城寺に置かれ仝十二年仲町北裏第千四百八番地に移轉す、廳舍は富岡生産會社の建物にして階上を其事務室に充て階下は生糸改所及び會社事務取扱所たりしが生産會社解散後北甘樂郡に賣却し郡有財産となり現今に至る仝所の大門は其以前七日市藩主前田家の表門なりしといふ

○富岡税務署　明治二十二年群馬縣檢税第五區派出所といひて仲町南裏乙百十八番地に置き後富岡税務署と改め、仝三十九年二月本郡酒造組合の協議により字上町北裏千四百六十七番地に新築移轉せり

○富岡登記所　明治二十三年高崎區裁判所富岡出張所なりしが後富岡區裁判所となるに至り本町有志者土地建物を寄附し現今の町役場跡に設置す、仝四十一年改築に付き敷地八百五十坪の内四百坪は舊裁判所敷地三百二十四坪と交換殘四百五十坪は富岡町より寄附仝四

十二年三月竣工移轉す後大正二年高崎區裁判所富岡出張所（登記所）となり現今に及ぶ

○富岡土木駐在所　北甘樂郡役所境內廳舍に向つて南にあり

○北甘樂郡農會　郡役所內にあり

○北甘樂郡敎育會　郡役所內にあり

○北甘樂郡產牛馬組合　郡役所內にあり

○北甘樂郡肥料商組合

○北甘樂醬油釀造組合

○北甘樂酒造組合

○北甘樂郡自轉車商組合

○甘樂禁酒會　五十嵐文吾氏方にあり

○有限責任信用販賣組合聯合會甘樂社　明治十一年創立

○原製絲所　明治五年創立

○甘樂社富岡組　明治廿年の創立にして目下警察署前に新築中なり

○甘樂社光勢組　明治十三年の創立にして現今の原製絲所蠶業研究課の跡にありしが大正四年上町北裏に新築移轉せり

○甘樂社七日市組　明治十三年の創立にして益々盛んなり

○甘樂社宗岐組

○富岡生絹太織商同業組合　仲町市場亭にありて毎月二、七の日市況を開く

○株式會社富岡銀行

○株式會社甘樂銀行

○富岡倉庫株式會社

○醫院　醫會

○外科齊藤醫院　病室の設備あり

○眼科齊藤醫院　前同樣入院隨意

○內外科細谷醫院

○小兒科肥留川醫院　病室の設備あり入院隨意尙外科醫出張

○內外科神部醫院　病室の設備あり

○內外科中島醫院

○婦人科乾醫院出張所

○內外科三宅醫院

○入澤齒科醫院　五、九ノ日下仁田出張

○富岡齒科醫院　二、五、九ノ日下仁田出張

○深江齒科醫院

○北甘樂郡醫師會　郡內各國手の集會にして會場は重に甘樂基督敎會を使用す

上州新報支局

民聲新聞支局

報知新聞出張所

やまと新聞分局

上野新聞支局

上州實業新報支局

○中村座　明治十五年設置年中興業絕へず

○富岡消防組　大正六年現在

組頭　黑澤信太郎

第一部長　大岡　嘉吉

第二部長　吉井　梅吉

第三部長　伊藤由太郎

第四部長　畑　與三郎

第五部長　金庭　寅藏

○富岡弓友會　宮本町西ノ裏矢野文次郎氏方にあり明治四十年頃町內有志の設立せる者にて矢場の設けあり

○富岡興弓會　宮本町東裏高麗長太郎氏方にあり、大正六年四月八日發會式を仝町公園地に於て行ひ氏の宅に矢場を設け日置流雪荷派を以て高く目下門人百余名あり

○黑岩村

黑岩村は郡の東北にありて富岡町の北に接し東は小野村西は一之宮町、高田村に北は碓氷郡東横野村に境し上黑岩村、下黑岩村、黑川村、別保村の四大字に分れ地勢は丘陵起伏して小谷其間に蜿蜒俗に九十九谷と稱す、大字上黑岩村、下黑岩村は此の中に點在する部落の總稱にして小谷中田あり、畑あり、人家あり、雜木林あり、谷窮まるが如くにして又開け其の盡くる所を知らざるが如く只大字黑川村、別保村は後に丘陵を負ひ前方展開して富岡一之宮を一目に見ゆ土質は粘質壤土にして礫少く穀菽よく實る、只碓氷郡東横野村に接

する所大山灰を交ゆる砂土あり、面積東西一里八町南北十八町に達し戸數三百五戸の人口二千百三十六人なり

○黑岩神社　大字上黑岩村字赤城にありて上下黑岩村の鎭守なり、祭神は大國主之神にして封祀の年代更に不明にて寶物として兩面の神鏡一面、石玉二個あるのみなり

○御靈神社　大字黑川村にありて崇道天皇、大屋宮田麿、吉備眞備の三神を祭り全村の鎭守なり

○雨宮神社　大字黑川村にありて祭神は詳ならず、旱魃の際は全神社に於て雨乞を行ひ同時に字三谷の頂上にある雨請塚に於て篝火を焚けば降雨必ず來ると言ふ

○藤塚稻荷神社　大字上黑岩村字機足にあり、丘陵の高所を占め四

方展開して眺望絕佳、老樹森々として夏猶冷氣を覺ゆと、祭神には稻倉魂命、猿田彥命、大宮女命なり

○遍照寺　大字上黑岩村字大日にあり、眞言宗平等山瑠璃光院と稱す、當寺は初め長福寺と言ひしも後亨保元年七月今の寺號に改めしものにして長福寺開山第一世住僧を西念と稱し、貞和元年四月三日始めて建立したるものなりといふ、開基は橿那新田義一朝臣彈正又左衛門尉と號す、新田義宗の男にして左中將公の孫なり、應永元年七月十四日卒し法號を永福寺殿大憧全治大禪定門と傳ふ、當寺中に梵文之碑に貞和二年の記あり而して長福寺として繼續の年代は貞和元年より第二十四世の住僧快深に至る、享保元年七月までにして其年歷三百七十年に涉り亨保元年七月故ありて今の遍照寺に改めしも

のなり故に快深をして遍照寺第一世とし起算すると雖も其の由る所は貞和元年にして現在に至る迄四十有世代の五百八十余年となれり

○大日堂　大字上黑岩村字大日の前記遍照寺境内にあり、其由來沿革は左の如し

大日堂は貞和年間の創立にして文明十年增築して大に修飾を加へ隆盛を極めたり、然るに其の後火災に羅り傳來の文書悉く燒失し僅に尊像を遺奉せしのみにして其燒灰を掻き集め之を大日塚と稱し來りしが物變り星移りて之を知るものなかりき、時に長福寺二十三世の住僧快安の元へ三異人來りて快安を導き此の大日塚に至りて敎ふる所あり、快安奇として敎に任せ家上の大榎に就き其の根の邊を堀りしに不思議なる哉阿字を刻みし一の靈石在りしのみ

ならず一幹の榎を八幹となし枝上に髣髴として大日の繪像を現はす等奇異言ふべからざりき、於是乎快安隨喜偈仰感激のあまり異人を拜せんとせしも其影を止めず、是より快安意を決し大日堂を再建せしと云ふ、今奥院の左傍を少しく跡れたる所に古碑あり、是れ當時奇異のありし紀念碑なり、爾來此事四方に傳播し多方の信徒頓に集りたり、就中領主前田右近衛太夫利豊公は大に歸依して屢此處に歩を運ばれ後遂に奥院を建立し胎藏界の尊像を彫刻安置せられたり、快安の弟子快深其後を襲ぎ長福二十四世の住職となるや益々大日如來を尊信して寶永八年二月堂宇を擴大にし正德二年五月奥院を改築せり、玆に於て快深は師父快安の素志を果し大日如來の功德多方に及ぶを思ひ遍照寺と改稱するに至れり、蓋

し光明遍照の義に出でたるなり、其後寶曆年間と明和年間と二回火災に罹りしが住僧諦清奮起して鋭意再建を圖り遂に四方信徒の淨財を得、又前田家尊信の所縁により用財を悉く前田候に仰ぎ且つ本郡宮崎村の豪農鈴木重兵衛は本堂、奥院、鐘樓門等の屋根を寄附せしを以て安永九年十一月建立再び成り代々遍照寺の住僧大日堂別堂として法務を傳へ以て今日に及べるなり

寶物は左の如し

骨　大蛇の骨或は龍骨と稱す　數枚

鏡　大中小の三面あり

大には天下一中島和泉守藤原貞次と銘あり

中には藤原作とあり

小には藤原吉次とあり

傳說　大日如來の利、益々として世に喧傳するの說あり、そは元祿十四年の頃大蛇あり、蛇蜒として村内に蟠居し害を村人に與へんとせし時大日如來之を防ぎ地底に埋め給ひしに此時山河鳴動して山崩あり、世に之を蛇崩と云ふ、今堂内に傳はる蛇骨は寬政九年村人集りて小川より堀り得たるものなりと猶其の一部は前田家に献じたりと云ふ

○小學校の沿革

明治七年九月上黑岩村遍照寺に黑岩小學校を設立し上下黑岩村の兒童を收容し本村普通教育の基礎を立てたり、仝十八年四月町村合併

の結果七日市小學校に合併し七日市小學校黑岩分校と稱す、仝二十四年九月二十二日町村制施行に際し上黑岩、下黑岩、黑川、別保を合して黑岩村とし黑岩分校を黑岩尋常小學校と稱し、大字黑川村に分教場を設けたり、仝二十五年四月十五日教育勅語謄本下賜せらる仝年十一月十二日黑岩尋常小學校及黑川分教場を各獨立の尋常小學校とし黑岩村第百七十四番地に指定假校舍を建築し黑岩尋常小學校と稱し仝校内に黑岩高等小學校設置の許可ありたり、同時に尋常科を三學級に高等科を四學級に編制す、仝二十六年五月十九日尋常及高等の教科を併置し黑岩尋常高等小學校とす、仝三十九年三月二十四日黑岩實業補習學校を本校に附設し今日に至る

○黑川村名の起因　太古經津主、武甕槌の二神命を奉じて東征せしとき道を此地にとり荊棘相閉し進むことを得ず因りて命じて之を燒かしめしに灰燼川を埋めて流水爲に黑し、神之を見て黑川と云はれしと、其川は今の高田川なり、此溪由來菖蒲多し故に菖蒲谷或は菖蒲の庄と云ふ、今猶菖蒲谷の名一之宮町貫前神社の北方に殘れり

黑川の川の主なる燕子花

今も昔も色はかはらず

○黑川村の沿革　今を去る七百二十七年前即ち後鳥羽天皇の元曆元年（安德天皇の壽永三年にして平宗盛帝を奉じて西海に走りし翌年）七月北甘樂郡黑川鄉の領主澁谷某勇敢にして將軍の感賞を得たることと正史に見ゆ是を次て見るに當時既に純乎たる一村落の存在せしや明なり、傳へ曰ふ建立は遙かに前代にして本村は神武の昔より既に

存せりと、一之宮の分裂が遠く崇神天皇の朝にありしを見れば其說必ずしも排すべきにあらず、蓋し當時の所謂黑川鄉なるものは其境域甚だ廣く現時の大字黑岩村、七日市、一之宮等を包括したるものにして今一之宮町の分裂を尋究するに人皇十代崇神天皇の七年十一月汎く諸神を祭り各國に國社を置くの事あり恰も今の貫前神社を國社として黑川村鄉の南部に封祀せらるるに及び其地を裂きて一之宮と名つけ、下て天和二年前田利孝氏南黑川の地に封せらるゝに及び其地を七日市と稱せり

○古　蹟

○機足塚　大字上黑岩村字機足にあり猶其近傍に藤塚、菖蒲塚、臺塚等ありて機足塚の由來を說くには藤塚よりなり、仝塚は人皇二十

八代宣化天皇第四の皇子多治比古王の曾孫上野大守多治比眞人縣守の古墳にして天平の頃築かれしもの、其北方にあるは菖蒲姬の古墳にして菖蒲塚と云ふ、菖蒲姬は支那の機人なり、縣守の支那に至り し時從つて來り一之宮貫前神社の神衣を織ると云ふ、菖蒲塚の北約五十間許りの所にある古墳こそ即ち機足塚にして菖蒲姬の機足を埋めし所にして機足塚の西方約一丁許りの所に機足臺を埋めし臺塚あり、此塚より大小二箇（大直徑約五寸、小直徑約二寸）の石玉を堀り出し現に黑岩神社の寶物として藏す、開け行く御代と共に彼く謂れある古墳も耕されて畑となり、桑園となり、今は僅に其の跡を止むるのみなり

○石神　大字黑川村字辻平にあり、太古石器時代の遺跡にして兵器

製造所のありし所なり

○城山　大字下黑岩村字別保にあり、鎌倉幕府創始の當時甘樂の領主、澁谷高重の館趾なりと今は御嶽神社を祀る

○官公署

○黑岩村役場　大字黑川村にあり

○黑岩駐在署　大字下黑岩村にあり

○一之宮町

一之宮町は郡の中央に位し西は吉田村に接し東は富岡町に及び南は鏑川を距てて高瀨村及額部村に北は高田村及び高田川を距てゝ黑岩

村に界し、地勢は町の中央を西より來れる丘陵脊骨狀をなし、殆んど東部に達して終る、大字宮崎村及大字一之宮町の一部は此丘陵の頂にあり、丘陵の南部及北部は富岡方面の平野に連る。田島村、神農原村は丘陵の南部平地にあり、又宇田村、坂井村は北部の平地にあり、脊骨をなせる丘陵は西に走りて吉田村の北方に至りて終る、又神農原村の南方鏑川を距てゝ西より東に連れる山脈あり、何れも一丘陵たるに過ぎず、土質は神農原村、田島村及一之宮町の一部平地に連る部分は、運積立にした宇田村、坂井村方面又是に同じ、宮崎及び一之宮町の一部丘陵に屬する部分は定積土なり、前者は重に砂質壤土にして、後者は粘質輕鬆土なり、面積は東西廿二町卅二間南北九町二十五間、戸數六百十四戸、人口三千九百六十一人なり

○貫前神社　一之宮町にあり國幣中社貫前神社と言ひ、經津主命を祭る（古は拔鉾明神と云ふ）命御名を齋主命と稱へ、延喜の制名神大社に列し後上野國一之宮と稱し現今に至る、太古鴻濛の世天神天祖の勅を奉じ大將軍として彼の不順を逐ひ國土を拓き東國を定むるに方り、諏訪大神不服にして信濃國に據り勅命に反く、大神此地に本營を定め給ひ、天照皇大神を祀り荒船山に出陣し、信濃國に攻め入り征伏歸順せしめ荒船と碓氷の嶺に國境を定め、其鉾を拔て此地に立て給ひしより拔鉾明神と稱へるを以て即ち其當時の創始にして、所謂神代鎭座の大舊社なり、故に朝廷の尊崇他に異り、正位を授け給ひ神寶と勅額を進せられ隨て世々武將も膽仰怠らず、國司の御劒を奉上する源頼義、義家の奥羽を平定する相模五郎雷電を祈る、各

靈劒を蒙りて神馬と御劒を納む、元冠の役特に敵國降伏を祈願あらせられたる全國一之宮の内七社の第一社なり

全國一之宮七社（上野一之宮、武藏一之宮、駿河一之宮、伊豆一之宮、若狹一之宮、美作一之宮、肥後一之宮、）

新田義貞義重の此大神を尊信祈請して各感應を蒙る等史上に存する所なり、德川氏も亦先例に倣ひ社殿を造營し、神領を附し寶物を寄する等其尊奉知る可きなり、征露の役及日獨戰役には勅使參向して宣戰奉告祭を執行せらる、征露戰勝勅使參向して平和克復祭を行ひ紀念として陸軍大臣より戰利兵器を奉納せらる、社殿は人皇二十七代安閑天皇の御宇と白鳳三年三月建造せりと云ふ、其當時の隨神の像今に形を存す、其後足利尊氏造營の棟札あり、德川家光大に土工を起し社殿の改造をなし、六代將軍の修繕を加へたるものにして、

三代將軍の棟札と共に存し、現今の社殿は則是なり、又仝社は安閑天皇御在位二年間中の創祀にして五十一代平城天皇大同元年に神封二戸を寄せられ、五十四代仁明天皇承和六年六月從五位下を授けられ五十六代清和天皇貞觀元年正月正五位下より從四位下に、仝九年六月從四位上に仝十八年四月正四位下に五十七代陽成天皇元慶三年十月正四位上に、仝四年五月從三位に叙せられ、第六十代醍醐天皇の時延喜の制名神大社に列し、延喜十六年從二位に進められ、第七十三代堀河天皇康和五年六月社司に中拔を科し神事を穢せる崇御卜に顯はれたるを以てなり、第八十六代後堀河天皇寛喜元年十一月將軍藤原賴經人を遣はして神劔及神馬を獻ず、第百二十二代明治天皇明治四年五月十四日國幣中社に列し今日に至る

寶物は各種を通じて五百余種あり、劔類、鏡類最も多く重なる物を記せば

一勅額　正一位勳五等拔鉾大神、聖武天皇御眞筆

一刀劔　三條小鍛冶宗近、源義家奉納

一古代太刀　六孫王經基公、源義家、清原武衛、新田義貞、織田信長、武田信玄、北條氏直、前田利家、脇屋義助、德川家光、仝綱吉等奉納

一甲冑　新田義貞、武田信玄奉納

一弓　俵藤太秀郷、源賴朝奉納

一鐵砲　野田善清作奉納

一金屏風六枚折一双　德川家光奉納、畫表土佐左近將監筆、裏狩

野法眼元信の筆

一三十六歌仙額（三十六枚）　書狩野久次郎筆、書大橋入道龍慶筆

一諸家手鑑一帖　德川家光奉納

一銅馬一疋　新田大炊介奉納

一白銅月宮鑑（鏡）一面　明治四十五年二月四日國寶と成る

一銅鏡梅雀文樣一面　大正六年四月五日國寶と成る

一銅鏡竹虎文樣一面　仝上

鏡は古代のものを初め德川家光以下奉納一百六十余面あり

○大臣神社　字大臣にあり藤原時平公を祭り現今は貫前神社境内末社事比羅神社に合併す

○和合神社　大字田島村字生田にあり、伊裝諾、伊裝丹命を祭る、

仝村の北端に字鳥居塲と稱する地名あり、茲に昔貫前神社の鳥居ありし所にして現今貫前神社に建設せられある、勅額鳥居は此所にありたるものなりといふ、又此村に往古より貫前神社の鬼退治の祭を執行する醜鬼の首塚あり、古は此塚の附近を射塲崎と云ひしが、西端に巖の突出して奇なる觀あり、故に現今俗に岩崎と云ひ居れり、又此村に御供田と稱する地名あり此所より貫前神社へ神饌米を献じたる事ありと

○諏訪神社　大字宇田村字東小谷にあり、建御名方命、八坂刀賣命を祭る、仝村は元貫前神社の玉垣内と云ひ、村の北端に高田川と稱する川あり、往古は貫前神社の大祭の節神官の此川にて祓ひを行ひたる所なりと、現今は仝社境内末社日枝神社に合祀せられたり

○廣鉾神社　大字宮崎村字廣鉾にあり

○諏訪神社　大字宮崎村字中町にあり

○白山神社　大字宮崎村にあり

○富士神社　大字神農原村字生産にあり

○小本寺　大字一之宮町にあり、當時は天臺宗山門派に屬し天德四年六月七日の創立にして貫前神社主從四位尾崎志摩守光明を開基となす、故に姓を採り山號とし、諱を採り寺號とする由、然るに往古燒失し重寶緣記灰燼となり原因は不詳と雖も當國の名刹なり、中興開山左馬頭多田滿仲の男美大麿即源賢法印なり、又足利尊氏曾て造營せる由、其棟札に貞和五年巳十二月八日と記載しあり、降て天正十九年卯十二月德川家康朱印三十石を賜ふ、明治維新悉く上地とな

欠

○永乗寺　一之宮町大字宮崎村字柳澤にあり、當寺は曹洞宗にして三河國南設樂郡新城村永住寺三世鵬雲文翼和尚を請して開山となす法嗣某を住持せしむ、後派替となり宇田村の神守寺四世明本底和尚を請して更に開山となし、寺門を興し三河山永住寺を延命山永乗寺と改稱す

○彌陀堂　一之宮町大字宮崎村北中道にありて淨土宗なり

○藥師堂　仝町大字仝村字本城寺にありて天臺宗なり

○乗願寺　仝町大字仝村字城谷にありて大谷派なり

○小學校の沿革

明治六年六月一日一之宮小學校を創立し三會寺に假校舍を設け、仝

欠

十二年字坂町に校舍を新築し、仝十五年五月六日拔鉾小學校と改稱し仝二十三年町村實施に際し一之宮町、宇田村、宮崎村、神農原村田島村の一町四箇村を合併して一之宮町と稱し、各大字に分教場を置く、仝年十二月二十五日勅語謄本下賜、仝二十六年二月十五日坂町の校舍に西接して增築し、一之宮尋常高等小學校と稱す、仝二十九年一月八日二階建校舍成るに及び分教場の生徒全部の收容を見るに至れり、仝四十二年下町に二階建大校舍新築し仝所に移轉し現今に至る

○古　蹟

宇田城跡　宇田村字小谷にあり、山嶺平にして南北十六間東西二十

四間三尺の丸形をなす、是れ本丸跡にして此所を下る事一丈余廣凡五間帶曲輪あり本丸を圍む、又辰己方に當り平地あり、出丸と云ひ傳ふ、中古愛宕神社を勸請し故に愛宕山と唱ふ、大手の跡は辰巳の方にあり此山の東西に西小谷東小谷の字あり、永祿六年宇田城主小幡圖書宮崎城主小幡彦三郎と戰ひ負て仝所に於て打死せりといふ

○官公署其他

○町役場　一之宮町字下町にあり

○駐在所　一之宮町字下町中程より稍々下にあり

○駐在所　仝町字宮崎にあり

○一之宮銀行　仝町字下町にあり

○甘樂蛹搾油合資會社　仝町松山裏にあり、前途益々盛んなり
○折茂醫院
○田部井醫院

○丹生村

丹生村は郡の中央より北部妙義山の南、凡そ一里大桁山の東麓にあり、郡役所へ東南二里、縣廳へ東八里の地点に位す、地勢は西は大桁山南に亘りて吉田、小坂、妙義等の境上に蟠り、北は之れに連る連山に依り妙義、高田と境界をなし、南境又此麓より出ずる長足山に依り吉田村と境す、斯の如く本村は三面山を負ひ唯東一面のみ開けて平地をなせり、されば河流の方面は自から東流するや明なり、

土質は水成岩より成れる板泥岩、砂岩の面部を火山質と黄土を被ひ其後永き年月の間風雨に晒され地表は自然に兩者の占むる所となれり、凹所には板泥岩等質多く現はれ高丘部に黄土質を以て底地とす是等の表部の次第に崩解破碎せるものに有機物含有し表土をなす、面積は東西一里四町五十間、南北一里十町四十間にして、戸數四百四十四戸、人口二千九百三十四人なり

○丹生明神　大字下丹生村にありて當社は古昔三代、實錄清和天皇貞觀十七年十二月五日甲寅正六位上を授けられ、後保元二年丁丑九月丹生四郎金乘なるもの再建し、其後丹生山に居城したる新田小四郎源義重の孫又再建し、舊幕府より祭祀料として五石三斗の御除地を附せられつゝあり、慶應三年二月十五日社殿羅災煙滅し、其他は

不明にして丹生都比賣命を祭る、境内末社に稲荷神社、大馬神社、山神社、諏訪神社あり

○八幡神社　大字丹生村にありて大日靈命、八衢比古神品陀和氣命八衢昆賣神、大國主神、菅原道眞公、天兒屋命、速玉之男命、宇氣母智神、須佐之男命、岐神、事解之男命等を祭り、其以前八幡宮と號したりしが明治十一年二月仝村鎭座十一社を合祀して、新に丹生神社と改稱し今日に至る

○永隣寺　當寺は人皇百五代正親町天皇の永祿年間に草創せるものにして年を閲すること實に三百有余年なり、小幡國峰城主上總之介重定長男小幡彈正忠平信氏の開創する處にして、平信氏小幡村寶積寺十二世芳谷永曆和尙の室に入り、聊か佛敎の敎理を極め大に所主

の活眼を開き且つ永曆和尙の學德兼備にして勇邁なるを慕ひ、和尙を請して開山の師と仰ぐ、時に時氏國峰、宮崎兩城の主たり、故に寺領九千七百五十坪を寄附し自ら菩提寺と定め號して正壽山觀音院永隣寺と稱す、後信氏永祿十二年十二月六日駿河國蒲原の城に於て戰死す、依て家康宮崎城を奥平美作に給ひ以て息女を娶らせ室となさしむ、室當寺三代春慶和尙の戒德凡ならざるを賞し深く皈依し給ひ祈文を下して祈願所とす、三代將軍家光公往古の緣故淺からざりしを鑑み慶安二年八月二十日丹生村に於て朱印二十三石を賜ふ、天保年間に不慮の災害に遭遇し三百年余の古刹も遂に烏有に歸し、古書、古器物は悉く煙滅して、德川家より下賜の朱印箱の存するのみなり、其後王政復古となり現所有地山林田畑の外盡く奉還せり、茲

に二十一代小峰道能和尚寺門の頽廢を慷慨し力を再建事業に注ぎ、明治三十三年に至る八年間にして現本堂、庫裡、表門等を建築し始めて宿志を貫徹することを得今日に至れるなり

○金乘寺　當寺は人皇七十七代後白河院の御宇關白大政大臣藤原基經公十一代の孫和州川上の大守丹生四郎金乘候保元二丑の秋移住し開基せるものなり、什器としては傳來の長刀一振あり

○鳴澤不動尊　大字上丹生村にあり、鳴澤之瀧と共に知らる、然れども仝尊の古書廢亡し更に不明なり

○小學校の沿革

明治六年十二月一日上丹生村字五分一、下丹生村字福王寺原村字柳

觀音堂の三箇所に學校を創設し、明治十三年に至り原小學校を下丹生村に合併す、仝十七年十二月二日上丹生小學校と下丹生小學校とを合せ丹生小學校と稱し、分校を下丹生村福王寺に置く、仝二十五年四月一日北甘樂郡第一高等小學校より分離して丹生高等小學校を上丹生村五分一に置く、仝二十六年尋常高等合併して丹生尋常高等小學校と稱し上丹生村字八幡森に移し以て現今に至る

○古　蹟

○丹生山　上丹生村字新井にあり、嶺土丸形にして東西十六間南北十四間の二の丸三の丸とも見ゆる平地あり、東南西一体濠塹の跡を留む、仝所は傳說に曰く丹生の四郎金乘の城跡とも又は新田四郎義

重の居所とも云ひて其信僞何れにありや詳ならず、錄して好古家の藻鑑を俟つ

○三日月石　城の南方に三日月石といふあり、其上面に三日月の形をなしたる凹所あり常に雨水を貯へ渴することなしと、一說に依れば城主金乘が硯に用ゐたるものなりと、又曰く金乘が高田小次郎の爲めに夜襲を受し時之れに寫れる月影の燈然たるに敵は目をくらまし遂に近つくこと能はざりしと、又其靈水を眼病に用ゆれば直ちどころに癒ゆる者とし遠近といはず同患者の尋ね來るもの多しといふ

○御花畑　丹生を去る西方約二町許りの所に御花畑といふあり、之れ新田四郎義重の草花を養へる花園なりとか

○自害久保　丹生山を去る約五町の字箆の西に自害久保と稱する所

あり、之れ金乘が高田小次郎に攻められし時其妻の自害されし所なりと

○弘法池　御花畑を去北約二町許りの所に水廻りといふあり、之れ義重が用水を引きたるところなりと、其水源は矢張義重が困水の爲めに大なる池を堀たる所とて此邊一体を池の入りといふ、其所より更に西南に約五六町至れば大桁山に入る、ここに弘法池といふ小池あり、之大師が一笠一杖の行脚を思ひたち此の地に來りし時あたりに水なきを憂ひさせ給ひ杖の先を以て地に穴を穿ちたるに忽ちにして清水湧出し、永久不止の泉地とはなれり、後の人此の池ある爲め其便を得ること少なからずといふ

○荷取石　弘法池の南へ約一町ばかりの所に荷取石といふあり、之

れ丹生山牧場より出でたる名馬、磨墨の力量を檢さんとし其一つを着けたるところ馬は何物にか驚きしものと見え、忽ち駈け出し字竹乘谷澤の水田の中に落したりと、然して石は總計にて六個ありと

◎磨墨神社　上丹生と下丹生村との境に駒寄、簾の上といふ所あり傳聞く昔鎌倉公の愛馬磨墨が生れ古郷の大桁山惡しきの余り、鎌倉を逃れて丹生村に至ると聞き里民擧て之をくひとめんと怒め、現今の駒寄の橋に簾を張り猛ひ廻れる馬を漸く近寄せたるに、馬は一躍のもとに此簾を飛び越へ山中に逃け込みたりと其後磨墨は高田村字千福寺に至り斃れたりと里人此所に社を建て磨墨神社として祭れり

◎三光坊　下丹生村字中山に三光坊といふあり、之れ其昔三光坊といへる人自ら穴を堀り生きながら之に入り鐘を叮き念佛を唱へながら死を俟つこと二十一日にして其鐘の音絶ゆると共に落命せしところなりと、今に高き三尺巾二尺許の無文の石碑を建てらる

○官公署

○丹生村役場　大字上丹生にあり

○駐在所　前仝樣

○高田村

高田村は郡の西北部にありて、東は一之宮町及黑岩村に、南は一之宮町及丹生村に西は妙義町に北は碓氷郡西横野村及東横野村に境し地勢は長靴の形をなし、西北より東南に長く中央は縱に長く一帶の

低地をなして田畑多く茲に開け、南境及北境は土地高く丘陵をなし殊に足先に當る所最も高く、此丘陵の上に幾分の畑地あり、然し南北境一帶に丘陵ありと雖も山岳と稱すべきものなく、土質は多く粘土質にして腐植質の地少し、高田川沿岸は礫土にして、土壌に砂礫を混じたるものなり、面積は東西一里二町、南北五町にして、戸數四百四十四戸、人口二千九百三十四人なり

○生壽寺　當寺は曹洞宗にして慶長元年の草創にて開山を然叟全廓大和尚といひ、仝村字菅原村陽雲寺第六世の住職にして、學德兼備の高僧なりしかば衆庶の歸依少からず、茲に一宇を建立して信廣山生壽寺と云ふ、慶安二年德川三代將軍家光公より寺領十六石の朱印を賜はる、寶物は左の如し

一御朱印寫　家光公より家茂公に至る九通
一大般若經　六百卷
一三重小塔　南蠻鐵製　一基
一百萬塔　一基

右百萬塔は大和國法隆寺の寶物にして明治四十年七月十五日一基を當寺に分與せられしものにて、仝四十一年一月國寶に指定せらる、今は唯僅に法隆寺に殘れるのみとなれり

○正法寺　當寺は大字八木連にありて眞言宗にして、本尊は弘法大師なり、弘仁七年空海上人四十二歳の時此地に錫を止めて村民を勵まし土地を開拓して一宇を建立し、其座像を安置して本尊となし、天正年間小幡城主織田信雄公當寺の武運長久を祈願す、其後信雄公

の次男薙髮して當寺の開山となり、龍池山正法寺と名く、明治十四年三月二十日出火の際寶物其他悉く灰燼となし仝十五年四月二十一日再建して現今に至る

○眞福寺　大字下高田村字本村にありて天臺宗なり

○正法寺　眞言宗にして碓氷郡中野谷村清元寺へ合併せり

○小學校の沿革

明治七年一月八木連村、高田村に創立し仝十七年合併し北甘樂第五小學校と稱し、位置を下高田村に指定し、仝十八年五月十八日指定地に開校す、仝二十五年十二月高田小學校を解廢して高田尋常高等小學校と改稱し現今の場所に新築移轉せり

○古　蹟

◎筑前上　上高田村字筑前上なる山上にあり、崩落して現今に至りては古形見るべからず、唯數間四方なる凸狀を殘せるのみ、然して仝所には其昔稻葉筑前守の居所なるを以て今尙字に稻葉前、稻葉上筑前、筑前上等の名あり

◎鄉士谷津　八木連村字鄉士谷津なる城山と稱する山上にあり、筑前上壘壕と同樣稻葉筑前守の居所にして筑前屋敷といふ、今は耕地となり又は山林となりて其跡を見ず

◎高田壘壕　下高田村字城の腰山上にありて俗に之れを帶曲輪と言ひ、高田肥前守の壘跡にして後高田小次郎の居となる

○官公署

◎高田村役場　大字上高田村にあり

◎高田村駐在所　大字上高田村にあり

◎八木連駐在所　大字八木連村にあり

○妙義町

妙義町は郡の西北にあり、西は上野三山の一なる妙義山を背に負ひ碓氷郡臼井町本郡小坂村を控へ北は碓氷郡西横野村東は本郡高田村及丹生村に接し、南は小坂村に境す、地勢は西北部に妙義山の分峰なる白雲山峙ち其南に金洞山、東に金鶏山聳ゆ又東部より南部に

亘りて大桁山連る、土質は概ね粘土質にして水氣を含むこと多く、砂礫を混ずるもの極めて稀なり、面積は東西一里十四町、南北一里五町廿間にして、現住戸數四百廿七戸、人口二千八百卅六人あり

○菅原神社　大字菅原村に在り、菅原道眞公を祭れる社にして社傳に道眞公二十五才の時、自ら二十五才の現像と七才の像とを刻み、二十五才の像は河内國道明寺に納め、七才の像を上野國天沼の里に送る、今の神体童子是なり

○吾妻神社　大字諸戸村字吾妻屋にあり、橘姫命を祭る

○妙義神社　大字妙義町に在りて日本武尊、磐長姫命、丹生大神、豊受大神、菅原道眞、大納言長親公を祭り鄕社とす、社記に曰く、第二十八代宣化天皇の二年に鎮座せりと、元は波己曾の大神と稱へ

居りしが、三代實錄二貞觀元年三月二十六日正六位を授けられ、元慶三年十月四日從五位を授かり、仝四年正五位となり、此社を妙義と云ふは明和七年小野竹叢と稱する人の溫古隨筆に華山院右近衛大將長親鄉白雲山の邊に來り、明巍と改む、白雲山は波古曾と稱し往古よりの鎭座なり、後人明巍を妙義と誤りたるものにして往昔妙義を明巍と稱せし所以は明々巍々たる音秀明媚を愛でて名けたるものなり、什寶は左の如し

一貞宮殿下御下賜品　三点

一八大龍王ノ鈴　支那より渡來　一個

一獨鈷　金銀張分名工の作　一個

一鳳凰ノ羽　大鳥ノ卵　大鹿ノ角　海馬ノ牙

以上の四点は東叡山よりの寄進

一白雲山圖　狩野右京時信筆　一幅

一觀音像　探幽齊筆　一幅

一山水壽老人圖　探雪筆　二幅

一梟ノ圖　德川家綱筆　一幅

其他數十種あり

○陽雲寺　大字菅原村にあり、曹洞宗にして庚正三年十一月十四日の創立にして、開基は高田伊豆守盛貞の孫高田賴慶なり、其他は不明

○隨應寺　大字諸戸村にありて天臺宗山門派に屬し、慶安元年二月創建なり、寺内安樂心院一品公延親王尊の牌あり

○小學校の沿革

明治六年九月一日妙義小學校を設立し、仝八年六月十九日大字大牛菅原、諸戸に各小學校を置く、仝十九年四月一日前記の各校を合併し、妙義小學校となし、仝二十四年四月一日高等科を併置し妙義尋常高等小學校と改稱し仝三十四年四月一日新築なり現今に至る

○古蹟　古趾

○菊女之墓　大字中里村字五輪平にあり、永祿の頃甘樂郡國峰城主小幡上野介平信眞の配長野氏の侍嫗父は甲斐國巨摩郡藤井之庄より出でて小幡氏の臣となる　菅根正治の女なり　一日菊女主君の飯に侍する時飯中に針あり、讒者の舌頭に係り蛇責の刑を受く、本郡熊倉山中に池あり、桶中に蛇を容れ菊を其中に入れ、蛇集りて菊女の肉を嚙む、悲鳴久ふして死すといふ、安政五年四月小幡氏十一世の孫信濃國松代の藩士小幡長左衛門古墳の側に碑を立て菊女之墓九月十九日歿すとあり

○菅公硯之水　大字菅原村字天沼にあり、菅原道眞公の九州に流さるゝや其子女多數あり、父君の赦免を當時の流俗により誓書を草して神明に祈願したる時に使用せる水にして道眞公の薨去後子女等免れされずして此地に止り隨從の臣と共に公の靈を奉祀したるより菅原村の名稱起れるなりといふ

○城山　金鷄山東方山脚を總稱して城山といひ、高田氏の城趾なり

といふ

○官公署

◎妙義町役場　大字諸戸村にあり

◎妙義駐在所　前仝樣

○妙義山　妙義山とは白雲、金洞、金雞三山の總稱にして奥の院より更に奇石怪巖を越へ崖を攀ち峻嶮を登らば皷ヶ岳に達す、其より斷崖數千尺岩壁の削りたるが如き道を辿れば、南端なる相馬ヶ嶽に達す、奇石擧げて數ふ可らず、尙白雲山上の裏山を下り女坂より天狗の里宮を過ぎ、筆立岩、鋏岩の下に出づれば、中之岳の第四石門に似たる石門に達す、又尾花坂より南に向ひ九十九折なる坂を上ら

ば中之岳に至る、一本杉迄は道程困難なり、更に進まば第一石門に達す、石門をくぐり蟹の横這を鎖にて登らば第二の石門なり、之より難所を鎖にて下り第三の石門に出で、第四の石門に達す、此門の東に黑田の泣き石あり、故黑田伯の越ゑ兼ねて泣きたる石あり、今は此所を鎖にて越す、此の邊に大砲岩、胎内くぐり等を始め、怪巖充立し、眺望絶景なり、之より下り右すれば中之岳神社、旭嶽等あり、更に南方に聳ゆるは金鷄山にて見るべきは筆頭岩、子持岩とす尙干瀧とて十數丈の岩の窪みたる瀧に似たる所あり、其岩端を這ひ登りて干瀧の左方に出でまた鐵梯を登らば御嶽の祠あり、西に辿らば頂上に至る

○妙義の撰種園

北甘樂郡内に於て古くより果樹を栽培するは高瀬村の一部分にして同地方の地質は梨園に適するを以て果實頗る佳良なるが、未だ帝都の市場に出荷する程には發展せぬのであるが、唯妙義の撰種園は創設以來名聲を博しつゝあり、此撰種園の創立者は小澤善平氏と言ひ山梨縣山梨郡綿塚村の人、天保十一年九月生れ、明治初年横濱に出で糸繭商を營み巨萬の富を作りしが、當時我國より輸出の生糸に甚しき粗製濫造品あり、我國に於ても之れが生糸の出荷を禁止されしより忽ち絲價の大下落となり、氏も又多大の打擊を受け殆ど破産の悲運に陷りしが、斷然その一意を決し密に外國船に乘りて佛國に渡

り數年間困苦缺乏に堪へ、葡萄の栽培と釀造の方法とを學び、其後米國に渡り尙斯業の研究をなし、歸朝後東京下谷區谷中淸水町に一家を構へ葡萄の栽域を始め收穫の果實を以て純粹の葡萄酒を釀造したる結果非常なる好評を以て各地に購求されしより、氏も愈之が擴張の念を起し、妙義町大字諸戸村の中之岳道なる里俗御茶屋塲と稱する所を理想に適せる地味として金四十圓を投じ開園したるは、實に明治十七年十一月なり、又氏の栽培せる葡萄は米國産イサベラと稱する良種にして釀造庫は金洞山の岩窟とし製酒の成蹟甚だ良好なりといふ、其他梅酒、甘樂眞珠、葡萄羊羹、梅羊羹等を作りて販賣しつゝありしが後善平氏老病にて不歸の人となり、氏の長男開氏目下自宅にありて農作の余暇葡萄酒其他に就きて研究し明年よりは、

栗及桃を栽域し葡萄酒に衰らざる逸品を製作せんと目下計畫中なり

○小坂村

小坂村は郡の西部に位し東は下仁田町、吉田村、北は妙義町西は西牧村、南は磐戸村に接し地勢は淺間火山脈の支脈東南に走るもの數十條に別る、其余脈の一は南境を一は中央を一は北境を西より東に向ひて貫通し、土質は小坂平野の東部西牧川の北岸は概して有機質壤土、粘質壤土多く、南岸は石灰質壤土多く、中部及西部は兩岸共粘質及石灰質に富む、戸數五百四十七戸、人口三千六百五十三人なり

○中之嶽神社　大字上小坂村字中之嶽にあり、日本武尊、大國主命を祭る、當社の創立は遠く白鳳二年にして、往昔日本武尊東征の歸

途此山中に賊住めりと聞き登攀せられ、橘姫の遺屍として携帶せられたる姫の頭髪を見給ひて、深く追想の情を發せられしと、村人尊の嘆惜を思ひ武尊大神と稱し社宇を建立し、其後第五十五代文德天皇齊衡元年二月藤原冬嗣の末子日本武尊の遺跡を探需して、其巖上に祠宇を再築し、第七十四代鳥羽天皇壽永元暦の間に於て藤原祐胤鍛冶の名師を得て、神劔を模造し神璽して奉齊す、正平五年藤原冬房郷弟無夢上人此巖嶺に登り祠主として神器を護る、元和三年相州小田原北條氏の臣長清永く岩穴に住し、兵法、擊劔の奥義を極め、且つ神殿、拜殿を再築し、金洞山巖高寺なる一大巨刹を創立せらるる之れより武尊大權現並に大黒天と稱し、武尊を奥宮に、大國主命を前宮を齊かる、享保五年五月社僧祐覺正齊藤半左工門と事實を具進

し嵯峨御所より菊御紋付提灯二張を寄附せらる、第百十九代光格天皇享和二年三月社僧六世快全法印の際神殿、拜殿共壯麗の建築ありしが、元和元年正月二十八日山火起て煙燒し、領主松平玄蕃頭再築の思慮ありしが明治維新となりて領主との關係絶ち、神佛分離を施し、武尊大權現、大黑天の稱呼を廢し中之嶽神社となす、又巖高寺は變じて社務所となる、偶佐野伯爵登山せられ當社の衰頽せしを患ひ明治二十八年三月前宮再築續て奥宮の建築をなし以て今日に至れり寶物は左の如し

一伊勢物語寫本　三冊

一中之嶽神社掛軸　山岡鐵舟筆　一軸

一神劍　一振

一鐵下駄　一足

長さ七寸八分巾二寸六分高さ三寸重量五百二十匁

一鉋　一挺

田中義廣作にて巾八寸八分重量一貫七百五十匁

○雨降の松　社内に末社として水分の神鎭座しあり、領主小幡藩領大旱打續き如何ともなしがたく、依りて中之嶽奉行に命じて雨乞の祭文を奉讀せしめ、役人數十名の村人を引連れ、當山頂上に到りて雨降松を根扱ぎ來るや黑雲忽ち天を覆ひ大雨汤然として來たる、人民歡呼の聲湧くが如し、今も雨降松はかゝる効顯ありといふ

○荒船神社　大字東野牧村字駒形にあり經津主命を祭る、當社は一之宮國幣中社貫前神社の攝社なり、寶物

一神鏡一面　一唐銅ノ龍一器　一御戸張二垂　一刀一振（源頼朝朝納）

○小學校の沿革

明治八年一月下小坂村に公立小學校を創立し仝十八年五月北甘樂第六小學校と稱し、仝十九年四月高等科を分離して北甘樂第七尋常小學校と稱し、仝二十年三月坂東尋常小學校と稱す、仝二十四年四月勅語謄本下賜、仝二十六年四月更に第一第二分校を廢し小坂小學校とす、仝三十年四月高等科併置して小坂尋常高等小學校と稱し、校舎を新築、仝三十六年更に增築して今日に至る

○偉人

永井濱太郎　永井濱太郎氏仝郡高田村上原喜右衛門氏の男なりしが幼少の時出でて仝郡中小坂村永井政五郎氏の養嗣子となり、永井濱太郎と言ひ、家世農を以て業とせるが、性至て文事を好み最も俳諧に巧みなり、資性温厚にして慈愛心に富み義俠あり、村民事を構ふるや諸事を置きて之れを裁斷調停し、公私に盡せる事多く、明治四十二年四月二十七日一句を墓背に印して歿す、年七十九

○古蹟　古墳

○城山城趾　大字上小坂村字野井戸にあり、懸崖要害の地にして城

趾は山の絶頂に於て平地を得ること三十歩なり

○匿久保城趾　大字中小坂村字春日田の山にあり、多少夫れらしき趾を見るのみ

○城山城趾　大字東野牧村字桐木坂にあり、四面懸崖にして天正年間に西牧の古城に小幡播磨守昌富の居あり、其城趾詳ならず、按するに此所は小幡家の類族籠り居りたる者ならん

○里見左馬助義實の墓　大字下小坂村にあり、墓笠石に下基石のみなりしが義實此地に長く住し、長享三年四月七日薨ず、法名は杖珠院殿建室勝興大居士と云ひ今其苗裔本村にあり

○内藤玄蕃の墓　大字東野牧村字茶原口にあり、以前は内藤浪右衛門の畑にありしが、今は内藤長吉の所有地にあり、墓碑に養蓮院住

安懸心居士靈位とし右側に弘治二丙辰天六月二十六日とあり

◎庭屋安藝守直澄の室倉子の墓　大字東野牧村字大倉にあり、其石碑たるや苔蒸して千古の遺蹟を語るに足る、其苗裔は西原卯之吉と稱する者にして元亀二朱年八月薨ず、法名は大倉院殿海光妙月大姉中臣直澄室とあり、其位牌又西原氏方にあり、庭屋安藝守は永祿年間多野郡根小屋の塞にありしが武田信玄に攻められ、仝二年十二月戰死す、室倉子は一子を召して逃げ此地に住す、現今此地を大倉といふは之が爲めなり、其子を三學院と言ひ修驗者として世々此處に居住し佐藤と呼ぶ、後明治二年より西原と改稱せり

◎下仁田戰爭　元治元年甲子十一月十五日水戸藩の正義黨武田伊賀守田丸稲之衛門等凡其勢八百余騎西上せんとして當地通行の際、下

仁田町に泊す、時に當國高崎城主松平右京亮輝照は筑波山戰爭以來幕府の命に依り追討として家臣堤克寛を大將となし出馬せしむ、正義黨は高崎勢の押寄することを前知し、諸方口々に番兵を附け置き高崎勢の攻寄するを見て正義黨は薄暮より軍の手分を定めたり、高崎勢は何の考案もなく無二無三に南蛇井村より梅澤峠を起へて下小坂村字竹の鼻まで先勢を押出す、時は同月卯の刻なり、双方より大砲、小銃を放射す、正義黨は高崎勢の東に當り、字熊野山其他の山續きに兵を連ね高崎勢を中にとりて打立つ程に正義黨の一小隊は高崎勢の陣中なる側面の岩上松杉の立籠たる中に潜みて、大將堤克寛を狙擊して之を朴す、其悲報味方に傳はるや忽ち全軍の總潰となる正義黨は之を見て取り益々蕩進す、高崎勢必死となりて戰ひしが利

あらず十五六町引き退き一番手、二番手共敗走するを見て、後勢又々右往左往に散乱し、彈丸輜重を道に棄てゝ逃ぐ、されば十數町の其間は銃器、彈藥、武器類を以て山の如かりし、然るに耻を知る武士は何の顏あつて主君に見ゑんやと、義勇の士數十人は急に同村安道寺附近に止まりて浪士と戰ふ、暫時苦戰、浪士爲めに死するもの多く且其敵しがたきを見て火を放ちて下仁田に退く、高崎勢も之れより杉木峠を差して退去せり、此一戰に於て高崎勢の戰死者三十六捕虜七、浪士の戰死者三十なり、浪士は高崎勢の戰死者を皆首斬りて下仁田町の龍栖寺に埋葬せりと云ふ却説、十七日正義黨は下仁田を出發して西上の途に就き、中小坂村に差掛るや幕府の命によりて關東取締出役石井鑵之助、松本隣次郎等の下知により當村より以西

十四ヶ村(今の東野牧村、東宿村、入山村、西野牧村、南野牧村)の人民獵銃を徴集して民兵を組織し字平滑及熊野社に控居せり、正義黨は同日午後に至り字春日田まで軍勢を出し、一手を字平滑に出したれ共間もなく引き退き、春日田の軍勢と合して佛平より蜘蛛淵を渡りて急遽熊野社を襲ひ、又大砲を今の小學校前に据へて銃砲彈を浴びせかくれば烏合の民兵一と溜もなく敗走せり、依て正義黨は軍勢を纒めて西本宿を差して去れり、今の熊野社前の戸扉に當時の彈痕ありと

○名勝

○中之嶽　山脈は碓氷郡に跨り東北嶮岨南は原野石門十五箇所奇巖

怪峰甚多く、金洞山の地たる巨巖亂峰峭立して其景勝天下に冠たり昔時石門に入るを許さざりしが明治以後始めて奇峰石門を數ふるに至る

◎玉綾の瀑布　中之嶽の下流にあり高さ十丈五尺にして上小坂村を經て西牧川に合す

◎蜘蛛が淵　中小坂村字寺附にあり、淵の兩岸巖壁屹立して小坂川流れ來りて一大瀑布となりて轟然直下す

◎石動瀑布　東野牧村字落澤にありて高さ五丈三尺あり

○官公署

小坂村役場　大字中小坂村にあり

小坂駐在所　前仝所にあり

○西牧村

西牧村は郡の西部に位し、東は藤井、本宿村に南は蘆平に北は碓氷郡入山村に連り西は矢川、市野萱村を經て信濃國佐久郡に境し、地勢は四方共山脈を以て圍らし、土質は黒壌あり、赫土ありて桑、麻大麥に適す、面積は東西三里二十二町五十間、南北三里二町十間にして現住戸數六百九十戸、人口四千九百二十人なり

◎荒船神社　南野牧村字里宮にあり、天武天皇白鳳二年の勸請にして、經津主神を祭る

◎藤井神社　南野牧村字目明石にありて、菅原道眞公健御名方神を

祭る

○芦平神社　南野牧村字西畑にありて、健御名方神、大日靈神、譽田別神を祭る

○鏑神社　西野牧村字尾崎にありて、宗良親玉、伊與親玉、藤原夫人、藤原廣嗣、橘逸成、文屋宮田麿、菅蒸相、吉備聖多、健御名方命を祭る

○榛名神社　西野牧村字城山にありて、火產靈神、埴安比賣神、倉稻魂神を祭る

○淺間神社　西野牧村字小出屋にありて、木花咲耶姫神、健御名方神を祭る

○山祇神社　西野牧村字漆萱にありて、大山祇神を祭る

○中里神社　西野牧村字枇杷久保にありて、健御名方神、大山祇神を祭る

○諏訪神社　西野牧村字曲鵜にありて、大日靈命、健御名方神、日本武命を祭る

○長樂寺　西牧村大字本宿村にあり、曹洞宗にして綠野郡淨法寺村永源寺の末派なり、建久の頃弘誓入道と云ふ僧來りて開基、創設す什寶に十六羅漢(非殿司筆)十六幅、觀音像(僧定朝刻)あり

○西光寺　南野牧村字横間にあり、天臺宗にして往古燒失し開基不詳、亨保十九年重海法院更に中興す

○法勝寺　南野牧村字中平にあり、貞治四年三月姓海法院開基創建す、天臺宗なり

○福藏寺　南野牧村字三ッ瀬にあり、文龜元年清光法師開基にして天臺宗なり

○無量壽寺　南野牧村字中萱にあり、天臺宗にして往古より再度の火災に罹り古書燒失す、開基は天正十八年

○觀福寺　西野牧村字根小屋にあり、天臺宗にして嘉曆元年實榮法院の開基なり

○小學校の沿革

明治七年一月二十八日本宿村長樂寺を使用し、本宿小學校と稱し仝十年五月西牧小學校と改稱し、仝十六年四月西野牧村字柏崎に校舍を新築し上鍋學校と言ひ、第一分校を市野萱に第二分校を矢川に置

き、全十九年二月小學校區域を指定せられ、本校を北甘樂郡第八尋常小學校と稱す、後各分校を合併し西牧尋常高等小學校と稱し現今に至れり

○古　蹟

○幽崖城趾　南野牧村字横間の西方字曲輪にあり、永錄の頃武田家の士小幡某なる者居し、後天正年間北條氏の臣多目周防守居したりといふ

○根古屋城趾　西野牧村根古屋字城山にあり、山上に十間四方の平地あり、物見の塲所と云ふ、堀切の跡及石垣を存す

○關門の趾　本宿村字關所裏にあり、文錄二年德川氏創建し當時の

名主に交代勤番せしむ、所謂女街道にして善光寺參詣の男女は玆を通過せしものなりと

○官　公　署

◎西牧村役場　大字本宿村にあり

◎本宿駐在所　前仝所にあり

◎西野牧駐在所　西野牧村にあり

◎本宿郵便局　本宿村にありて明治十年五月一日設置

◎神津牧塲　神津牧塲は明治二十年南野牧村字物見山に牧畜を創始し、目下數百頭の畜牛あり、牛酪を製造して內地は勿論諸外國に販賣し益々發達を期しつつあり

○八幡鑛山　大字南牧村字八幡に在り全所一体の山脈より金銀銅鐵類等出で前途益々有望なり

○尾澤村

尾澤村は郡の西南隅にあり、東は全郡月形村に北は一部分西牧村と境を交へ其余は長野縣南佐久郡に界し西と南は全部長野縣南佐久郡に境し、四周山脈を以て圍繞し東端月形村に接する所、南牧川の流域に依りて僅に一條の門戸を開くのみ、土質は概ね水成岩にして面積は東西二里半南北二里半にして、戸數四百三十五戸、人口二千八百八十五人なり

○熊倉神社　大字熊倉村字森脇にあり、明治十年神社合併の布達に

基き神明社以下四社を合併す

◎羽澤神社　大字熊倉村字宮の前にあり、諏訪社以下五社を合併す

◎星尾神社　大字星尾村字棒ヲネにあり熊野神社以下一社を合併す

◎砥澤神社　大字砥澤村字日向にあり

◎諏訪神社　大字砥澤村字川窪にあり

◎砥山神社　大字砥澤村字小澤渡にありて、伊斯許理度賣命、大山津見神を祭る、當社は砥澤村砥切職工の氏神として砥山發見當時勸請せるものなり

○吉祥寺　當寺は星尾村字寺ノ上にありて、天臺宗にして星尾山多聞院吉祥寺と言ひ、天正年中重守法印の開基する所にして、爾來數回の火災に罹りて舊記盡く烏有に歸し其後再建せり

○中道院　當院は砥澤村字古宿にありて、應永年間の開基にして砥山明神の別當を兼ね元和年中堂宇の修繕をなし、今日に至るが天保四年正月火災に遭ひ、舊記古書悉く燒失せり

◎天人寺　大字羽澤村字大鳥屋にあり、無住なり

◎觀音寺　大字羽澤村字宮の入にあり、無住なり

◎砥山の發見　今を去る千有余年此地始めて開くるや、鄉人一日山に入る、老猿岩石にあて〻箭鏃を磨くを見る、是れ曾て獵夫の射損じたるものなるべし、鄉人之を採りて刀刄を礪くに及光水の如く其鋭利戰慄すべし、是に於て相傳へて之を採るに至れり、是れ本山の始にして後諸國に傳はり、此地の利得となりしかば鄉人之を德とし猿を以て神とし崇敬淺からず、砥切に從事する者今に至るも尙獼猴

を害せずと

○水穴神社　雨乞を以て名高き水穴神社は熊倉村字御神樂山の中腹に在り、讒巖屹立中間に深き洞窟あり、四時水を貯ふ、之を御池と稱す、旱魃久しきに彌り作物枯死せんとする時、所謂此御池の水を借り之を自村に齎せば天候忽雨を催し大雨に會すと、其靈顯遍く人の知る所となり、雨を乞ふ者少からずといふ

○砥澤の關所

砥澤村宿の東端に關所跡あり、關所長屋とて今尙家屋の一部を存すと蓋天正十八年秋德川家康關東に入るの際大字熊倉村住民に命じて信上國境なる余地峠を警固せしめ、同地人民之に就役せしこと三日

間に渉れりといふ、其要害の地たる知るべきなり、然れども信州に通ずる道尙二條あり以て咽喉を扼すべからず、三道大字羽澤村に會し砥澤村に至りて始めて一條となる、是れ要害偏强の所とて是に於て大字砥澤村に關所を設け來往怪しき者の檢閲より盜賊無賴の徒に至るまで皆此關門の監督たりき

○羽澤村の屋敷　元龜天正の際南牧七騎の名士ありき、其二騎は我尾澤村に住せり、蓋其祖は從五位下武藏守鎭守府將卒藤原秀鄕にして六世の孫廣德左衛門尉と稱し、新羅三郎源義光に屬し甲斐國に住し市川の鄕を領す、其十一世の孫重與市川五郎左衛門尉始め居を上野國に移せり、重與八代の孫重信市川豊前守といふ、小幡尾張守に屬し居城を南牧砥澤に構へ二子を生む、長子重元市川豊前守といひ

次子直義市川右馬佐といふ、長子砥澤を相續し、次子羽澤村に別家せり是れ所謂羽澤屋敷なり、其子孫等明治の昭代に至り居を長野縣に移し家屋は全村避病院へ地所は目下尾澤尋常高等小學校の敷地となりたり

○官　公　署

○尾澤村役場　大字羽澤村にあり

○砥澤郵便局　大字砥澤村にあり

○砥澤駐在所　大字砥澤村にあり

○羽澤村駐在所　大字羽澤村にあり

◎砥石業　工業は大字砥澤村に於ける各砥山の砥石工業なり、砥山

開堀の歴史は前述の如くなれば、今現在に於ける一班を記さんに採堀者十數年前までは幕府以來の元締一人なりしが、漸次新山を發見して今は數名の多きに至れり、其最盛に採堀せるは北甘樂郡富岡町篠原桑吉氏にして職工採堀量最も多く他は現今中止の有樣となれり職工百十數名採堀量約三萬余梱切賃約千五百余圓、販賣價格に至りては其眞相を知るべからず、東京市を始めとして名古屋、大坂、京都、埼玉、栃木、奥羽地方殆我本州の半ばに亘れり、又上野砥、砥澤砥の名稱は古きは鎌倉時代より、近きは德川時代を風靡して明治及大正の今日に至りては益々嘖々たり、運輸之が爲に開け交通之が爲に繁く物貨金融風俗人文之が爲に他と異なる所あり、然して之れが砥石の發掘場所は字奥今戸、字梨の木平、字南平等にして砥石名

は虎砥、青の白玉等なり

○月形村

月形村は郡の西南隅に位し、東及び北は磐戸村に隣り、南は多野郡に接し、西は尾澤村に境し地勢は山嶽四周に峨々として聳へ、毫も平地なく畑は急阪をなし一の稻田を見ざるによりても地勢の一般を窺ふに足るべし、土質は土地高燥にして礫土、砂土多く地味肥沃にして膏脂乏しからず菽麥、桑、楮、茶、蒟蒻等に適す面積は東西一里十二町五十間、南北二里三十五間余にして現住戸數四百四戸、人口二千七百七十八人なり

◎大日向神社　大字大日向字宮の平にあり、明神宮、月神社、竈神

社、熊野神社、諏訪大明神等を合併す

◎六車神社　大字六車村字住吉にあり、八幡神社、高根神社、日枝神社、三島神社、住吉神社、貴船神社、山神々社等を合併す

◎大仁田神社　大字大仁田村字小山澤にあり

◎安養寺　大字大日向村にありて、來迎山普光院安養寺と號し明應八年の人皇第百三代後土御門天皇の代の創立にして、開山は重照上人なれども其傳記は詳ならず天臺宗なり

◎大雄寺　大字六車村にありて光明山長壽院大雄寺と號し、天臺宗にして永觀元年の創立なり、開山は密宕上人なりと、然して當時は慶長七年火災に罹り古記錄更になし

○小學校の沿革

明治七年三月三十日大日向村、大仁田村二箇村に學區組合を設け南牧南學校と稱し仝村市川半六宅を假校舍とす、仝十年安養寺に移轉す、仝十四年福乘寺に移轉し仝十八年新築なり移轉す、仝三十三年三月學校組合を解き、高等科を併置し月形尋常高等小學校と改稱し大正四年校舍新築成り移轉して現今に至る

○古蹟　鑛泉　名所

○大字大日向村字笹ノ平は昔時笹渡所と稱し、永祿年中武田の臣市川氏、永野信濃守の臣小幡氏との古戰場なり

○大字大仁田村と信州大日向村との境界に字湯の澤と稱する所あり其所より鑛泉を出し瘡毒、眼病等に特効ありといふ

○大字六車村に天神瀧　釣掛瀧、辨天瀧あり、就中釣掛瀧は蟹掛山より發する溪流を集めて飛瀑となる、直下十二丈白布を晒すが如し風景絶佳なり、又仝村字鄕田に九十九谷あり、山岳重疊し自ら谷をなし深きあり、淺きあり、其間に怪巖立の石介在し千態萬狀筆を以て言ひ難し、晩春躑躅の咲きたる時は最も奇觀を呈すといふ

○官公署

○月形村役場　大字大日向村にあり

○月形駐在所　前仝所にあり

○磐戸村

磐戸村は郡の西南にあり、東は青倉村に接し南は多野郡中里村及上野村に界し西は月形村北は西牧村、小坂村に隣る、仝村役場より各大字を見るに小澤村は東部に千原村は稍中央部に磐戸村は中央部より西に檜澤村は西南部に大塩澤村は西北部にあり、面積は東西約一里南北約二里あり、戸數六百七十七戸、人口四千六百六十八人なり

◎檜澤神社　當社は白鳳二年の創立にして經津主神、鹿屋野比賣神宇氣母智神を祭り、天文三年正月武田刑部之を再建し慶長五年十二月燒失し仝七年四月中野七藏又造宮す

◎磐戸神社　大字磐戸村字西岩戸道下にありて、大日靈命、火產靈

命、伊斯許理度賣命、健御名方神、須佐之男命、經津主神を祭り、村内六社を合し現今に至る、其他末社八社あり

◎千原神社　大字千原村字上の原にあり、大日靈命、大山津見神を祭る

◎熊野神社　大字小澤村字住吉にあり、明治四十三年三月十四日許可を得て大塩澤神社と合祀し、熊野神社と稱す

◎小澤神社　大字小澤村字日影小澤にあり

◎不動寺　大字大塩澤村字黑瀧にあり、黃蘗宗なり、當時は元正天皇の御宇行基菩薩の作る所とて、黑瀧山不動寺と言ひ其後嵯峨天皇當山奇瑞を得て叡感淺からず、靈元天皇延寶三年潮音道海禪師住山以來僧俗の歸依頗る多く境内の魏然たる大伽藍は高く雲表に聳へ、

幽邃なる禪窟は遠く深山淺谿の中に在りて、怪岩奇石所々に相起伏し踊るが如きもの、舞ふが如きもの、千態萬狀形容すべからず、殊に日東、星中、月西の三岩は高さ各百尺以上に達し、萬春寺門を擁護するが如く、飛泉高く讒巖に懸りて千丈の白布を瀑すが如し、古來仝寺は關東の高野山と稱し、上州隨一の靈場として世人の渴仰參拜する所なり

○永昌寺　大字檜澤村字澤にあり、開基は小幡彥三郎則信にして曹洞宗なり、當寺は本郡丹生村永隣寺へ末寺にして正保三年八月十四日の創立なり

○慈眼寺　大字千原村字小千原にあり、建久六年三月伊豆の藤家比丘慈眼禪尼、其孫大房丸祐時を伴ひ來りて字藤塚に一寺を創建し以

て慈眼寺となす、後大鹽澤川漲溢して流設し惟古墳を殘すのみ、天正年間小幡右衛門督行房再び現地に建つ、仝十八年三月上杉氏と戰ひ行房本村小澤村に於て戰死し今尚其墓碑ありと

◎西方寺　大字大塩澤村字日影にありて天臺宗なり

◎聖德寺　大字大鹽澤村字久保坂にありて天臺宗なり

◎圓學寺　大字大鹽澤村字遠入にありて天臺宗なり

◎寶性寺　大字大鹽澤村字田の尻にありて天臺宗なり

◎妙傳寺　大字小澤村字大萱にありて日蓮宗なり

◎隨勝寺　大字大鹽澤村字小塩澤にありて後土御門天皇の文明十三年三月八日の創建にして寛政五年燒失し再建して今日に至る

○小學校の沿革

明治六年十一月磐戸村に小學校を創立し、仝三十年大字千原村に校舍を新築し移轉し高等科を併置、磐戸尋常高等小學校と改稱して現今に至れるなり

○狹岩・渴水　承和年間弘法大師行脚して大塩澤村に至り、將に黑瀧山に登らんとし途狹岩を過ぐ時に口渴し民家に入り飲む乞ふ、主翁、師の敝衣破鞋尋常の乞丐兒と撰ぶこと無きを見て則ち謝して供すべきものにあらずと、大師口に呪文を唱へて去る、爾後此附近の溪流常に渴盡し、滯瀧飲料の用をなさずといふ

○天野八郎、氏は本村大字磐戸村の人、本姓を大井田忠告と言ひ、

忠恕氏の第二子なり、故ありて天野氏を胄す、少にして奇氣あり、讀書、擊劍を好み四方に漫遊す、時に德川十五代將軍慶喜郷將軍の職を失ふや幕府、薩藩の朝廷を瞞着し德川氏を淩辱する者となし、慶應四年二月十二日檄を四方に飛ばして旗下の士を雜司谷、茗荷谷及四谷鮫ヶ橋、圓應寺等に集め一橋家の重臣澁澤成一郎を頭取とし天野八郎を副長とし、伴門五郎、須永於蒐之輔、本多晋等之れが幹事たり、共に死を決して德川氏の爲めに寃を伸べんと誓ふ、慶喜郷之を論じ且其篤志を賞し郷の東叡山の隱居を守らしむ、仝年四月十一日郷水戸に退くに及び朝廷之を解散せんと欲す、命を奉せず山岡鐵太郎に命じて之を論すも聽かず、東叡山座主輪王寺を擁し依つて德川氏を恢復せんと謀る、己にして官兵を殺し民財を奪ふの擧あり

五月十五日遂に之を討つに決す、官軍黑門口を襲ふ、酒井宰輔近藤武雄等善く拒く、然れども烏合の兵命令の出づる所なし、八郎谷中口を守ると雖も機を見て黑門口を援ふ、而して谷中口亦官軍の襲ふ所となり、前後敵を受け守ること能はず、黑門口先づ敗る八郎敗兵數人と護國寺に議し諸所に分散し機を見て西城に火を放ち間に乘じて總督宮を奪ひ、後德川氏恢復の事を哀願せんと欲す、七月十三日本所の砲匠炭屋文次郎の家に在り會々告る者あり、官兵を遣はして之を捕ふ、八郎方に客と食す急を聞きて八郎は刀を拔き挺して屋上に飛び去る、官兵捕ふる能はず銃を攢め乱射す、丸額に當りて捕ふるを得たり、獄に在ること數箇月仝年十一月八日を以て病歿す、年三十八小塚原の叢塚中に葬る、翌年同志者私に墓石を其上に建て顯

彰院誼道と云ふ

○湯端鑛泉　大字大塩澤村字高原にありて、胃弱、肝臓病、月經不順、慢性子宮加答兒其他に効あり

○湯の澤鑛泉　大字檜澤村字湯の澤にあり、泉質は鐵泉にして火傷凍傷、創傷に効あり

○鳶の湯　大字磐戸村字鳶巣にあり、主治は前記仝様なり

○官公署

○磐戸村役場　大字磐戸村にあり

○磐戸駐在所　前仝所にあり

○磐戸郵便局　前仝所にありて郵便物以外に電報を取扱ふ

○青倉村

青倉村は郡の稍西に偏りたる中央南部にあり、地形宛も蠶兒の葡萄するに似たり、地勢は南方杖植嶺より多野郡に界し、北は小坂村に東は下仁田に西は磐戸村に境す、面積は東西約三十町、南北約二里十六町にして戸數三百七十戸、人口二千六百二人なり

○青倉神社　大字青倉村字關平にありて、稲倉魂命建御名方命、大山祇命の三社を祭り、元祿四年九月創設なり

○八幡社　大字大桑原村字森上にありて、應神天皇、譽田別命を祭る、創設は詳細に知る事を得ざれども一説に曰く白鳳年間村内に惡疫流行し、八幡大神に之が平癒を祈願せしに、霊驗顯著にして忽ち

全癒せしかば、筑紫の宇佐八幡宮を勸清して、鎮座の神と尊信するなりと

◎修學寺　大字青倉村字小川原にありて下仁田町清泉寺末なり、天臺宗にして摺水山修學寺といひ、開基は今より七百年前なりと

◎來迎寺　大字青倉村字清水にありて、天臺宗にして下仁田町常住寺末なり、現今は無住にて詳細知るに由なし

◎青岩寺　大字青倉村字白岩にありて眞言宗なり、當寺は慶安三年四月廣譽法印堂宇を建立し、天保十二年正月燒失し仝年七月庫裡一棟を建築し現今に至る

◎常光寺　大字宮室村にありて、開基は明應元年なりしも數度の火災にて不詳なれども後文政九年再建し現今に至れるが、當寺は下仁

田町常住寺末にして天臺宗なり

○小學校の沿革

明治七年青倉村字小河原明照院を借受け開校し青倉學校と稱す、仝三十年青倉尋常高等小學校と改稱す

◎石灰業　嘉永安政の頃青倉村名主赤岡與惣右衛門なるもの字白岩に一大石灰礦を發見し、自ら資を投じて三座の窯を築き、一日平均九百貫程を燒き出し明治十四年神戸惣左衛門之を讓り受け、其子惣三郎及土谷七平の二氏協力して規模を擴張し、十五座の窯を築き一日平均四千五六百貫を製出し青倉石灰の需要は頓に增加して大に世の信用を博するに至れり、其後二箇の會社組織せられ一を石灰製造

合資會社、一を西毛石灰製造株式會社と云ひ、製出高一日約一萬余貫に及び現今にては下仁田、富岡方面に生石を以て一ヶ年約百余萬貫を出すに至れり

○官公署

○青倉村役場　大字青倉村にあり

○青倉駐在所　前仝所にあり

○下仁田町

下仁田町は郡の西部にあり、東は鏑川、大谷川、白山を以て馬山村及吉田村に接し西は南牧川を以て青倉村に、南は青倉村、秋畑村及

多野郡日野村に界し、北は下小坂村に接す、地勢は四面皆山を以て廻らし且南牧、西牧の二川町の中央を貫流するを以て平地少し、現在戸數は九百十二戸にして　人口は四千五百五十三人なり

○諏訪神社　大字仝町字上町に在りて、建御名方命の外十三神を祭り領主小幡尾張守の祖先信濃國諏訪社より勸請し、明治四年大政官の定則に依りて村社となり、仝四十年大字吉崎村吉崎神社、川井村菅原神社、近戸神社等を合併せり

○稲荷神社　大字仝町字山際に在りて、宇迦之御魂命他四神を祭る當社の創立は不詳なれ共遠近老若男女の崇敬厚く、參拜の人今に至るも絶ゆることなし

○常住寺　大字仝町字蠶影にありて、天臺宗にして五大山常住寺と

號す、當寺の開基は元弘四年二月二十五日後醍醐天皇の御宇畠山重忠の孫重快出家し新田郡世良田山長樂寺住職了惠に從ひ、秘密敎法を受け、之を創建し後火災に罹り什寶、古書、悉く烏有に歸す

○清泉寺　大字仝町字箕輪にあり、當寺は後堀河天皇の御宇畠山重俊の創設にして天臺宗なり

○靈山寺　大字仝町字山嶺にあり、仝町有賀宗平の祖先某の開基にして天臺宗なり

○永福寺　大字仝町字山際にあり、天臺宗なり

○龍栖寺　大字仝町字上町にあり、開基は雄仁上人にして文明十五年三月の建立にして天臺宗なり

○善福寺　大字川井村字上の平にあり、天臺宗にして開基は曆應元

年八月和光法印なり

○小學校の沿革

明治六年七月龍栖寺を假校として下仁田學校と稱し、仝三十年四月高等科を併して下仁田尋常高等小學校と改稱し、大正三年新築落成し移轉す

○鷹巢城趾　大字吉崎村字中島にあり、桑、田、麥、畑の間に內外堀臺、石垣等依然としてあり、其他は跡更になし

○水戸浪士と高崎藩士の古戰場　德川幕府のとき、水戸浪士武田伊賀守、田丸稻之右門、山國喜八郎、藤田小四郎等兵士八百余人を率ひて常州那珂港を脫し西京に赴かんと武州本庄驛より多胡郡吉井町

甘樂郡富岡町を經て本町に止宿し高崎藩士と町の西北字伊勢山道より下小坂村字岩下、田中、安道寺邊に戰ふ、高崎藩士死者四十余人水戸浪士死者僅に三人、實に元治元年十一月二十六日の朝なり、此戰に於て武田の小豎野村丑之助重傷を蒙り、因て自ら請ふて刎首し其屍骸を本町字岡横町に埋葬す、時に年十三才、久保田藤吉、齊藤仲次の首級は字下町本誓寺に埋葬し現今に至るも皆墓石あり

○官公署其他

○下仁田町役場　大字下仁田町にあり、以前の小學校を役場とす

○下仁田警察署　大字仝町にあり、富岡の分署とす

○下仁田登記所　大字仝町にあり、高崎區裁判所下仁田出張所とす

◎下仁田郵便局　大字仝町にあり、明治二十九年創立なり

◎有限責任信用販賣組合聯合會下仁田社　明治廿六年創立

◎株式會社下仁田銀行

◎五雲堂今井醫院　病室の設備あり益々旺盛

◎婦人科藍田醫院

◎富岡齒科醫院出張所　毎月二五九の日

◎人澤齒科醫院出張所　毎月五九の日

◎矢島醫院

◎城　醫院

◎上毛新聞支局

◎上野新聞支局

◎歌舞樂座　株式會社にして大正三年の創立なり

◎西村座　明治四十四年創立なり

○馬山村

馬山村は郡の稍西部に位し、馬山、白山の二大字より成る、東は一之宮町及額部村に境し西は下仁田町に接し、南は仝町字栗山村に隣し北は鏑川によりて吉田村大字南蛇井村及小林村に境す、地勢は一般に南は高くして北に低く、東南西の三方は山丘を負ひ、鏑川及横瀬川、鎌田川に沿ふて細長き平地なり、土壌は重に黒壌にして礫を交へ肥沃なり、然れ共東南西の山林に接する處は赫土にして米、大小麥、大豆、麻、桑、蒟蒻等に適し、面積は東西一里十町南北一里

二十町、現住戸數四百一戸、人口二千八百五十三人なり

◎馬山神社　大字馬山字畑中にありて、大日靈尊其他十四神を祭る

◎不動明王　大字馬山村字蒔田にあり、安和元年慈惠大師此處に草堂を建立し不動明王を安置す、其傍に不動之瀑又は天雨瀑布と稱するあり、高さ十七丈五尺余にして懸崖より直下し頗る壯觀なり、其瀑布の傍に洞穴ありて不動明王の奥院と稱し、不動明王の彫刻せる石あり

○安養院　大字馬山にあり、阿彌陀山地福寺安養院と號し、當寺の草創は康暦二年の開基は享保十二年なり

◎榮命寺　大字馬山村字蒔田入にありて、安和元年慈惠大師の開基なり、再度の火災にて詳細不明

○米山寺　大字馬山村に在り創立は延元二年明勤法師にして南蛇井村實相寺末寺なり

○小學校の沿革

明治五年學則の始めて下るや故神戸禎三郎氏等卒先經營し遂に翌六年榮命寺を假校とす、仝三十年三月三十一日馬山尋常高等小學校と改稱し、仝三十四年字辻替戸及若宮との敷地を購求し新築工事に着手し、仝三十五年六月二十六日落成移轉し仝四十三年四月十日校舍の狹隘を告げ增加建築す

○神戸禎三郎　神戸禎三郎氏は舊名を禎助と呼び、天保十三年一月二十日馬山村に於て生れ、家代々農を以て業となす、明治二年岩鼻

縣より名主を命ぜられたるを始めとして公役を奉ずる事、實に二十有余年、其間事務を調理し且つ事を處する機敏にして曾て澁滯を生せしめる事なく下仁田町より小坂村に通ずる縣道の如き峻峻にして車馬の交通は申すまでもなく、日常人の往來も實に危險にして物產の增殖及び其物價の平準を得ざるを憂ひ、新道開鑿の事業を企てたる結果、車馬の交通始めて開け、往來の便愈々よく公衆の利益は益々莫大となり、爲めに下仁田町も現今は富岡町も及ばざるの有樣なり、其他殖產に心を用ひ、製絲機械場を設け製糸の改良模範を示す等其功績の顯著にして明治十四年十二月七日藍綬褒章を下賜されたり

○官公署

◎馬山村役場　大字馬山村にあり
◎馬山駐在所　前仝所にあり

○吉田村

吉田村は郡の中央より稍西に位し東は一之宮町、西は下仁田町及小坂村南は鏑川を隔てゝ馬山村に對し、北は丹生村に接し、土質は岩石より水成岩及變成岩に成り又土壤より壤質砂土及壤土等より成る面積は東西一里十八町南北二十町、現住戸數五百十六戸、人口三千五百七十人なり

○字藝神社　大字神成村字赤城にありて稻倉魂神を祭る、當社の創立は詳かならずと雖も傳説に依れば、人皇第三十九代天武天皇の白

鳳年中の創祠なりと云ふ、然れども天明年中火災に罹り社殿、寶物悉皆烏有に歸し後享和元年四月之を再建して現時に及ぶ

○鳥總神社　大字中澤村にありて市杵島姫尊を祭る

○飯繩神社　大字蚊沼にあり

○最興寺　大字南蛇井村にあり、當寺の創建は延元二年の春天臺宗の晃榮權僧都初めて當地に一寺を建立し妙德山最興寺と稱し、文明五年三月小幡國峰の城主平朝臣小幡憲重當寺の廢頽を慨き、自ら開基となり、伽藍を一新し曹洞宗とし妙德山を大德山と改め當寺の宗匠たる天倫正挺禪師を迎へて開山とす、然れ共正挺謙遜にして其位に居らず群馬郡白鄕井村大字上白井雙林寺の二代一州正伊禪師を開山に請し自ら第二世となれり、開創當時は仝村附近を伏見の里、吉

田鄕南蛇井村と稱せり

○勸學寺　當寺は天臺宗山門派にして、如意山蓮華院勸學寺といひ正曆元年源家多田滿仲の四男美丈出家し源賢と號し玆に開山す

○昌福寺　當寺は寶永四年長存法印開基の由天臺宗にして十二山正業院昌福寺と言ふ

○實相寺　當寺は天臺宗にして法性山妙法敎院實相寺と稱し、開基は人皇五十七代陽成天皇の御宇元慶四年尊意僧正にして社地に天滿宮あり、菅原道眞の師法性上人此地に來り庵を構へて子弟を敎ふ、故に法性山と云ふ、可惜明治三十三年四月六日火災に罹り烏有に歸し記錄等更に見るものなし

○小學校の沿革

明治十八年南蛇井村に南蛇井學校、神成村、小林村聯合の鏑學校、中澤村に中澤學校、蚊沼村蚊沼學校あり、仝三十年南蛇井尋常高等小學校と稱し現今に及ぶ

○官　公　署

◎吉田村役場　大字南蛇井村にあり

◎吉田駐在所　前仝所にあり

○高　瀨　村

高瀬村は郡の中央郡に位し、北は鏑川を隔てゝ富岡町に境し、東は菅川を挾んで福島町及小幡村に接し、南は額部村に連なり、西は鏑川を隔てゝ一之宮町に界す、地勢は南方一帶は高瀬山の丘陵にして中央部より北部は平地にて東北に傾斜し、地土質は粘質壌土なり、面積は東西一里七町二十間、南北十八町二十間、現住戸數四百二十九戸、人口三千二百五十人なり

○高瀬神社　大字高瀬村字桐淵にありて、村内十七社を合祀し、譽田別命、建御名方神を祭る、合祀以後は祭典を毎年四月一日とし境内に於て養蠶具其他の市開けり

○光巖寺　大字高瀬村字寺山にあり、曹洞宗にして人皇第九十六代光巖院天皇の御開基にして御震翰、御寶物、古器、古文書等多く寶

庫に藏したりしが天文、正保、安永の三度火災に罹り七堂伽藍より寶庫に至るまで盡く灰燼となり、今や確乎たる古記錄の現存せるものなし、然れども或る一説に曰く、正慶三年光嚴天皇寶位を遁れさせられ曆應二年邊土幽去の陸奥を指して東路へ御下向遊ばされしが其途中當國碓氷の嶺に登臨有て一之宮、菖蒲ヶ谷の雲機高瀬山、松原の勝景等叡覽に留り、彼の地へと仰せられ御意に任せ御輦を向け當所河北の大名仁義と云ふ、江原にて御供の諸候に御暇賜はり、夫れより當村廻車と呼べる坂より、御輦を戻され此處の草庵に駐り給へり、領主小幡左衛門尉康行厚く尊奉し天意を伺ひ、前村瀬の郷、後村箇の郷の二邑を御供料となせり、而して天皇奥州下向の本意空くなりたるに依り、箇の郷の内に宇大州と稱する地名を設け離宮を

造り、花山院大納言を向けられ茂木權守をして守護せしめらる、正平四年天皇御在位中再度參内有りし、御歸依僧越前國永平寺七世鷹林禪師を當國に召降され當寺を經營せしめ鳳翔ヶ谷鳳來寺光巖禪寺と號す、仝七年八月禪師と共に輪廻解脱の御修行怠慢なく猶神社、佛閣詣廻の思召にて諸國御歴覽の後當山に還幸せられ富士塚を築き朝夕彌勒上天經を修し登避の思召有しに滿願の後仝十九年七月七日崩御せられたり、御尊牌御法號を光嚴院量仁禪法皇と申し奉り、其當時の御製に

志留知らむ、世は啻ゆめの跡もなし

黒布にひびく松風の音

○北向觀世音　大字大島村の西端なる山腹の一堂宇にして崖下に鎬

川の清流あり眺望頗る佳なり、嵯峨天皇弘仁五年弘法大師東國行脚の折から神人の御告に依り、桂の神木を信濃國小縣郡に得むて大士の尊像三体を彫刻し、一体を野州に、一体を信州別所に安置し、一体を此大島村に安置したるものにして、則北向厄除觀音菩薩は是なり、康平四年將軍源頼義公陸奥の首長安倍貞任等討伐の時、此の大士の靈夢に感じ伽藍を此の地に建立し、翌五年遂に賊徒を誅罰し益々大士の靈驗を感ぜられたりと言ふ、又大士の御誓には千變萬化に身を現し無量の衆生を度し給ひ、此は鬼門の災あれば遍く之を救はんと北に向て立せ給ふとぞ如何なる厄難に逢ふとても此大士を念じ奉れば安穩快樂を得せしめ給ふとの信仰にて、例年一月十八日の縁日には遠近の善男善女の賽すること夥し

○小學校の沿革

明治五年八月學制を頒布せられ學區を定め、仝六年十月齊藤壽雄氏の持家を假校とし高瀨小學校と稱す、仝二十五年十二月高瀨尋常高等小學校と改稱し、仝二十八年六月校舍狹隘なるを以て增築し現今に至る

○天皇塚　光嚴寺境內上の原に盤桓たる古墳あり、往古より天皇塚と稱し、光嚴院天皇の御陵墓と言ひ傳へ、旱魃の歲には農民當山に參籠し齊戒沐浴して雨を祈るに必ず靈驗ありと言ふ、其塚の傍に五輪の碑あり、此詠を彫刻しありしが風雨寒凍のため僅に礎のみ今は殘れり

○茶臼山　天皇塚の西に當り双体をなせる丘陵にして、其頂上に碑あり、曰く

上野國北甘樂郡額部村大字南後箇村字北山ニ茶臼山ト稱スル古墳有リ、往古ヨリ靈地トシテ人々之ヲ尊ビ來ルルモ其何タルカヲ詳ニセザリシガ、明治二十七年三月二十一日、該里人澤田茂市、岡田近吉、澤田藤作ノ三氏、偶此地ヲ堀リテ諸種ノ古物ヲ獲タルニ由リ、初テ貴重品ヲ埋メ置キタル所ナルヲ明ニセリ、發見品中古鏡一面ト石輪一個トハ宮內省諸陵寮ノ御用品トナリ、他ハ悉皆澤田吉五郎氏ノ有ニ歸セリ、其品目ヲ擧グレバ曲玉、管玉、石輪力、鏃、土器破片、埴輪、圓箇破片等ニシテ澤田氏ハ項目其一部ヲ東京帝國大學人類學教室ニ献納セラレタリ、今此等發

見ノ性質ト其發見地ノ狀態トヲ併セ考フルニ、此古塚ハ正シク高貴ノ人ノ墳墓ニシテ其造營ノ時代ハ今ヲ距ル千數百年前ト推側セラル、此所ニ葬ラレタル者ノ誰タルヤニ至リテハ、容易ニ考定スベキニ非ズ、茶臼山ノ稱ノ如キハ塚ノ形狀ヨリ出デタルノミ、古墳ヲ呼ブニ此名ヲ以テスル事、其例ニ乏シカラズ、決シテ研究ノ端緒トハ認ムベカラザルナリ

今ヤ此地方ノ同者諸氏相議シテ、古物發見ノ事ヲ後ニ傳ヘンガ爲、碑ヲ建テントシ余ヲシテ其文ヲ撰バシム、余未ダ精査ヲ遂ゲザルニアラズト雖モ此擧ヲ賛スルガ故ニ喜ビテ之ヲ諾シ、諸氏ニ代リテ事實ヲ述べ且少シク思フ所ヲ附記スルコト爾リ

明治三十一年三月東京帝國大學理科大學教授坪井正五郎撰

以上記するが如く坪井博士の考説として此古塚は高貴の人の墳墓なりと推測せられしは敬服の外なし

○内匠壘墟　大字内匠村字上宿にありて回字形をなせり、現今は耕地となりたれども、猶本城或は丸の内と呼稱す、往古光嚴天皇當村に御駐蹕あらせられ、此所に離宮を構へられしを天皇崩御の後、御家臣内匠之助居館とせしが中古藤田彈正の居城となりたり

○官公署

○高瀨村役場　大字高瀨村字中高瀨にあり

○高瀨駐在所　前仝所にあり

○額部村

額部村は郡の東南部に位し、西は馬山村に、東は小幡村に南は秋畑村に北は高賴村に接す、土質は黑壤にして、砂礫或は埴土を混ず、面積は東西一里二十町、南北三十五町にして現住戶數五百八十三戶人口四千八百四十人なり

○染箇岡神社　大字南後箇岡村字菅原にあり、明治四十二年九月神社廢合に依り、南後箇村、岡本村、岩染村三大字の各神社を合併し以前は天神社と言ひしが三大字の村名に因て染箇岡と改稱するに至れり

○諏訪神社　大字野上村にありて、健御名方命を祭る

○西方寺　大字岡本村にありて天臺宗なり、當寺は人皇第五十九代宇多天皇の御宇月景上人の開基にして、禁裏御所の祈願所なり、禁殿、寶佛、彌陀如來を安置し、法華堂、常行堂、六供坊中の跡あり

○福壽院　大字岡本村にありて、創立は天正十七年五月にして開基は流孝上人なりといふ、禪宗にして詳細不明なり

○小學校の沿革

明治二十六年一月一日設立にして額部尋常小學校、同高等小學校を併せ本校を大字南後箇村に分教場を大字野上、岡本の二ヶ村に置き全三十一年十一月三十日野上、岡本の分教場を廢して本校に合併し全四十二年九月增築して今日に至る

◎古蹟　大字野上村に西平原城墟、牛田城墟、塩ノ入城墟等あり、傳說に依れば安藝某の居城なりしと、何れも崖狀をなし堀割等の跡あり、又大字岩染村に藤田の城墟あり、現に藤田峠といひ本村より秋畑村への通路なり

○官公署

◎額部村役場　大字南後箇村にあり

◎額部駐在所　前仝所にあり

○秋畑村

秋畑村は郡の東南に位し東北は小幡村、國峰及轟村に接し南は西御鉾山一帶分水界によりて多野郡と界し、北は額部村に西は稻含山に到りて盡く面積は東西三里、南北一里十八町あり、現住戸數四百四戸、人口二千八百四人にして、地勢は南北より南東に延び、其形煙草葉に似て土質は多く水成岩に屬す

○稻含神社　當社の創設は不詳なれども或一說に依れば、人皇六代孝安天皇の御宇旣に鎭座ありしといふ

○與市八幡　秋畑村小字那須にあり、村內古老の談に曰く、舊昔那須與市宗春下野那須野より來り、屢々弓術を學び後源平の戰に弓名を轟かしたるより、村民之を神に祭り與市八幡と名付け、又仝村を那須村と稱す

○來波不動　秋畑村小字來波にあり、境內廣くして不動尊像の他に

野栗神社を鎭座し、共に一大磐石上に安置せらる、仝所は所謂古色鬱然として實に掬すべき所とす

○天德寺　永正元年一峰儀天なるもの字入山の地をトし、一寺を建立して稻含山天德寺と稱す、當寺は以前臨濟派に屬し鎌倉建仁寺の末寺たりしが仝所に建立するに當り曹洞派となり、享保十七年小幡村寶釋寺の末葉となる

○西光寺　天文十九年の創立にして曹洞宗なり

○小學校の沿革

明治七年本村養學寺に設け秋畑學校と稱し、仝十六年字梅ノ木平に新築移轉し秋畑尋常小學校と改稱し、仝三十九年秋畑尋常高等小學

校とし今日に至る

○官公署

○秋畑村役場　字梅ノ木平にあり

○秋畑駐在所　前仝所にあり

○鑛泉

○赤谷鑛泉　字赤岩平の南方入山川の上流にあり、酸味を帶び且つ硫氣を含み腫物、火傷、胃弱等効ありと

○枇杷澤湯　字枇杷澤の東方裏根川の上流にあり、泉質無味なれども是又一種の炭酸泉ならんか腫物に効ありと

○小幡村

小幡村は郡の東南部に位し郡衙を去る一里十八町、東は新屋村、西は高瀨、額部兩村に北は福島町に南は秋畑村及多野郡の一部に界す地勢は低下せると雖も、一里有余を有するにより其西端に於ては、非常の高下を見る、面積は東西一里四町南北は一里十四町にして現在戸數七百五戸、人口九千九十九人なり

○赤城神社　大字小幡村字佐久間にありて豊城入彦命を祭る、創立は人皇十七代履中天皇の御代にして代々小幡氏、織田氏、松平氏の祈願祭祀あり

○八幡神社　大字小幡村字中町にありて應神天皇を祭る、正保二年

織田兵部大輔信良領内眞光寺村より移祀せるものにして、明治四十一年三月國峰村、石上神社、善慶寺村熊野神社を合併し、現今は小波多神社と改稱せり、其他上野村に今宮神社、轟村に嚴島神社ありし

◎長嚴寺　大字小幡村にあり、天臺宗にして往古火災の爲め書類燒失し記錄不詳なり

◎寶積寺　大字轟村にあり、下總國葛飾郡山王山村東晶寺の末寺にして仝國々府臺總寧寺即庵和尚を請して開祖とし、其當寺は天臺宗なりしが寶德二年小幡權頭平朝臣實高の時代より曹洞宗に改め、鷲翎山寶積寺と稱す、仝山の北に當り菊が池あり、菊女母子の靈を祀る

◎興嚴寺　大字國峰村にありて曹洞宗なり、天文十五年國峰城主藤田彈正顯高當寺を開基し華蕚山と稱す

◎長善寺　大字國峰村に在りて曹洞宗なり

◎福嚴寺　大字善慶寺村に在りて曹洞宗なり

◎寶泉寺　大字小幡村に在りて元和七年の創立なり

◎今宮寺　大字上野村に在り文永二年の開基にして天臺宗なり

◎龍門寺　大字小幡村に在りて明和四年の創立にして黃蘗宗なり、明治四年以降松平家の菩提所たり

○小學校の沿革

明治六年七月上野村今宮寺を上野小學校として開設し、仝十五年仝寺失火に付き小幡村製絲社に移し小幡小學校とす、仝三十八年十一月二十八日現在校舍新築落成に付移轉し現今に至る

○國峰城跡　大字國峰村宮城一千二十五番地に國峰城の古趾あり、其高さ約九百二十四尺にして、頂上は東西百間南北百二十間の平地とを存し、周圍に松、杉、欅等の古木繁茂し自然の城地を爲す、又頂上には家屋のありたる形跡を存す、天文年間小幡氏城を築て之に移る、小幡氏は垂仁天皇の朝上毛野八網田當國の大守となり、其家臣小葉多連を當郡の郡司となす、因て仝村一体を小葉多と稱す、後孝德天皇大化二年國守郡領を置き郡の大中小を定め、大領、小領を置き租稅の法、田畑の制を定めらる、時に小葉多氏は甘樂、多胡、綠野三郡の郡領を揮す後小畑と定む、元明天皇和銅六年詔して請國の風土記を編ましめ地名は務めて佳號を用ひしむ、因て小畑を小幡と改め以て今日に至れるなり

○小幡八景　大字小幡村に在り左の如し

粕澤之鶯　羽鳥が池　柏野之夜雨　清水之螢

連石山之秋之月　彌勸之晩鐘　赤城之幽靈松　御殿之櫻

○織田公事蹟　大字小幡村字崇福寺に織田信雄公以下の石碑あり其銘に曰く

德源院殿正二位前田府實巖眞公大居士
寛永七午年四月三十日　織田信雄公七十三歳

心芳院殿大中太夫羽林次將松巖淨靑大居士
寛永三寅年五月十七日　織田兵部少輔信良
織田信良四十三歳

寶泰院殿中太夫兵部侍郎節嶽英忠大居士
慶安三寅年七月九日　從四位下平朝臣信昌

陵雲院殿前中太夫拾遺輔闕兼越州大守岭巖維俊大居士
正德四甲午年七月初八鳥　織田信久七十二歳
織田信昌二十六歳

桃溪院殿中太夫兵部侍郎仙巖宗壽大居士
寶曆十二壬午年八月十八日　織田信右四十七歳

南溟院殿前泉州大守摶巖宗翼大居士
寶曆十四甲申年六月初二日　織田信富四十二歳

淨翁院殿前濃州大守默巖了然大居士
天明三發卯年七月初八日　織田信邦三十九歳

瑞岡院殿從五位下前親衛校尉德巖俊峰大居士
文政元戊寅年十一月五日　人名不詳

恭德院殿從五位下前若州大守淸巖良儀大居士

天保七丙申年八月四日　人名不詳

又織田家の系譜を見るに、桓武天皇十二代平相國清盛二十代織田信秀――信長――信雄――信良――信昌――信久――信就――信右――信富――信邦――信淳

○官公署

◎小幡村役場　大字小幡村にあり

◎小幡駐在所　前仝所にあり

◎小幡郵便局　前仝所にあり

○福島町

福島町は郡の東部に位し、東は新屋村に南は小幡村に西は高瀬村及富岡町に北は小野村に境す、土質は鏑川を境として北部は一般粘土質にして南部も同樣粘土を帶ふ、面積は東西二十町二十間、南北二十二町にして、現住戸數五百五十三戸、人口三千七百五十五人なり

○稲荷神社　大字福島町字笹に在りて蒼稲魂命、豊城入彦命を祭る當社の勸請は天長二年にして後應仁二年社僧某再興す、其後小幡播磨守武運長久を祈る、明和七年十一月再建して現今に至る、境内彦狹島王の御陵と稱するものあり、其入口(竪二尺横二尺五寸)より奥迄十間余ありて其廣き所幅二間奥四間高さ八尺にして天井は一枚石を以て覆へり、然して境内の面積は二町三畝二十九歩にして祠は中央丘上の凹所にあり、境内一般には幾百年を閲する老樹欝蒼として

轉た俗塵を離れしの感に打たる

◎諏訪神社　大字田篠村中央部にあり

◎君川神社　大字君川村中央の北端にあり

◎八幡宮　大字星田村中央の南端にあり

◎東覺院　福島町にありて眞言宗なり

◎慈覺寺　大字田篠村字中打出にありて眞言宗なり

◎光源寺　大字小川村字二日町にありて淨土洞なり

◎寶林寺　大字小川村字原にありて曹洞宗なり

◎傳宗寺　大字星田村字三室平にありて、創立は天正十二年にして開山は峰純和尚なりと、仝寺は京都府山城國葛飾郡花園村大本山妙心寺末にして臨濟宗なり

○小學校の沿革

明治六年十二月田篠村慈覺寺に開設し田篠小學校と言ひ、仝二十五年七月二十日福島町字天神林へ校舍を新築し仝校に移り、仝二十六年四月一日福島尋常高等小學校と改稱して今日に至れり

○官公署

◎福島町役場　福島町字中宿にあり

◎福島駐在所　仝町甘樂社眞榮組事務所にあり

◎鑛泉玉子湯　大字君川村の東端に在り明治十六年富岡町の韮塚氏仝所を流るゝ泉の玉子の香あるより一名玉子湯となして浴場客室等

を新築し浴客の便を圖りしが、其後上野鐵道の開通して福島及富岡町に停車場の設置さるゝや益々多忙となり、其後仝村の吉田榮吉氏韮塚氏より讓受け現今に至れるが、仝所は空氣の新鮮と四圍の閑靜なるを以て實に爽快を覺ゆ、又泉質は硫黃泉にして尙主治としては慢性冷痲質、皮膚病、潰瘍、火傷等に効ありといふ

○新屋村

新屋村は郡の最東部にあり、東は多野郡吉井町に南は仝郡日野村に西は本郡小幡村に北は鏑川を隔てゝ本郡小野村に對す、地勢は南北に長く東西に短く、南方山嶽多く北するに從つて平坦となり、鏑川に至りて盡く、土質は地質學上水成岩第三紀層に屬し平地は概ね黑

褐色をなせる土壤にして、米、麥、耕作に適す、戸數六百十一戸、人口四千百九十二人なり

○小學校の沿革

明治五年學制發布ありし以來仝八年天引村に天引學校、白倉村に白倉學校の二校設置されて以來三四校の分校となり、又合して二校となり又は一校となり、仝三十五年四月一日新築校舍成り、全部移轉し現今に至る

○名所舊蹟　古蹟

◎金光山　大字白倉村の東南部小幡村との境に在り俗に天狗山と稱